

福島県西白河郡

矢吹町文化財調査報告第10集

# 名代 A 遺跡

## 発掘調査報告書

平成2年2月

矢吹町教育委員会

福島県西白河郡

矢吹町文化財調査報告第10集

# 名代 A 遺跡

## 発掘調査報告書

平成2年2月

矢吹町教育委員会

## 序 文

名代A遺跡発掘調査報告書をこの度矢吹町文化財調査報告書として刊行することになりました。

明新地区は矢吹町東部玉川村との境、阿武隈川流域に位置し、周辺には数多くの文化財包蔵地が確認されており早くから文化が開けたと考えられています。

今回は、福島総合開発株式会社のゴルフ場開発に伴い発掘調査を実施しましたが、実施に当りましては日本考古学協会会員永山倉造氏に依頼し調査を進めていただくと共に、須賀川市教育委員会をはじめ、関係者の方々に御協力をいただきましたことを心から感謝申し上げる次第であります。

今回の調査では、竪穴住居跡、掘立柱建物、土坑などが住居跡から土師器が発見されました。土師器の特徴から、これらは、奈良平安時代のもものと推察されます。

現在、町教育委員会では、文化財案内板の設置、文化財めぐりの実施民俗芸能の掘りおこしと伝承などの文化財の保護保全を進めており、今後も町民の方々に文化財について一層のご理解とご協力をお願いするものであります。

この報告書が今後の調査、研究にご活用いただければ幸いに存じます。

平成2年2月

矢吹町教育委員会教育長

円谷行雄

## 調 査 要 項

遺 跡 名	名代A遺跡
所 在 地	福島県西白河郡矢吹町明新原80番地
調査主体	矢吹町教育委員会
調査期間	平成元年2月1日～4月20日
調査組織	担当者 永山倉造（日本考古学協会会員） 調査員 柴田令子（阿武隈考古学研究会会員） 大野昌子（阿武隈考古学研究会会員） 関根保夫（矢吹町文化財保護審議委員） 大内順子（阿武隈考古学研究会会員）
協 力 者	鈴木辰郎、吉田正義、小泉ツルヨ、大木セツ子、大木三重子、円谷マツエ 円谷浩一、円谷和二、円谷ソヨ、円谷トク
事 務 局	矢吹町教育長 円谷行雄、教育次長 大木豊 社会教育係長 遠藤大、主査兼社会教育主事 阿部正人 主事 熊田真由美、社会指導員 佐藤隆 学校教育係長 須藤修平、主任主査 渡辺要子、主査 佐藤寛子 主査 藤田忠晴、主事 国井淳一 中央公民館長 星圭之助 前主幹兼学校教育係長 青木修一 前学校教育係主任主査 堀勇二

## 凡 例

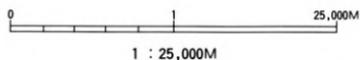
1. 本報告書は、矢吹町名代A遺跡発掘報告書である。
2. 本調査は、ゴルフ場建設開発工事に係り、緊急調査を実施した。
3. 発掘調査は、矢吹町教育委員会が実施した。発掘担当者は、日本考古学協会会員である永山倉造が当たった。
4. 本報告書に記載した遺構、遺物の実測図・トレースは、柴田令子、大野昌子、関根保夫書作成、執筆、編集にあたっては、担当者、永山倉造の指導のもとに、次のメンバーが参加した。柴田令子、関根保夫、大野昌子、大内順子。
5. 本書に収録した、遺構、遺物の実測図、拓影には、次の縮図を原則として、それぞれスケールを付している。遺構全体図  $\frac{1}{300}$ 、東西ベルト  $\frac{1}{80}$ 、住居  $\frac{1}{80}$ 、建物  $\frac{1}{60}$ 、土坑  $\frac{1}{20}$ 、 $\frac{1}{60}$ 、溝  $\frac{1}{60}$ 、その他の遺構  $\frac{1}{20}$ 、土器、拓影  $\frac{1}{3}$
6. 本報告書の執筆、編集の責任は、担当者の永山倉造にあり、発行の責任は、矢吹町教育委員会が負うものである。
7. 発掘調査によって得た資料および記録は、すべて矢吹町教育委員会が保管している。
8. 本書に記載した遺跡地名表は「矢吹町史 第1巻 通史編」「見で見る矢吹町史」の中から一部参考にしてしている。

# 目 次

序 文	
調 査 要 項	
凡 例	
第1章 序 説	1
第1節 名代A遺跡の位置・地形・地質・気候	1
第2節 名代A遺跡の歴史的環境	1
第2章 調 査 経 過	5
第1節 調査日誌概要	5
第3章 遺 構 と 遺 物	10
第1節 竪穴住居跡（第1号住居跡～第5号住居跡）	10
第1号住居跡（S I-01）	10
第2号住居跡（S I-02）	16
第3号住居跡（S I-03）	17
第4号住居跡（S I-04）	24
第5号住居跡（S I-05）	29
第2節 掘立柱建物跡（第1号建物跡～第10号建物跡）	30
第1号建物跡（S B-01）	30
第2号建物跡（S B-02）	30
第3号建物跡（S B-03）	32
第4号建物跡（S B-04）	32
第5号建物跡（S B-05）	35
第6号建物跡（S B-06）	35
第7号建物跡（S B-07）	38
第8号建物跡（S B-08）	39
第9号建物跡（S B-09）	41
第10号建物跡（S B-10）	43
第3節 その他の遺構（第1号遺構～第2号遺構）	44
第1号遺構（S X-01）	44
第2号遺構（S X-02）	46
第4節 溝跡（第1号溝跡）	47
第1号溝跡（S D-01）	47
第5節 土坑跡（第1号土坑跡～第2号土坑跡）	49
第1号土坑跡（S K-01）	49
第2号土坑跡（S K-02）	51
第6節 遺構に伴わない出土遺物	53
第7節 遺構外ピット形態表	54
ま と め	55
図 版	56



第1図 遺跡位置図



## 第1章 序 説

### 第1節 名代A遺跡の位置・地形・地質・気候

位置：名代A遺跡は、福島県矢吹町大字明新の明神西に所在する。矢吹町の南東部にあたり、東は阿武隈川を隔て、石川町鳥内遺跡と接している。

地形：福島県の県南地方は東部の阿武隈山地、南部の八溝山系、西部の奥羽山脈の山間部と、それに囲まれた盆地状の低地とからなっている。この地域は矢吹が原と呼ばれ、昔は行方原とも呼ばれており、須賀川、鏡石、矢吹にかけて平坦な台地が続いている。

東部は阿武隈川、西部は釈迦堂川により浸蝕され、河岸段丘と氾濫原を形成している。

地質：この地域の基盤は白河構造線にそった断裂運動による火山活動によって形成されたグリーンタフ層である。約2500万年前の新第三紀初頭の地層を呈し、その上に約200万年前の鮮新世末期から、約110万年前の更新世初期にかけて、火山の噴火によって形成された火砕流堆積物が厚くつもっている。鈴木敬治(1968)によりDⅠ層・DⅡ層と呼ばれている。これらは須賀川石、三城目石として石材として利用されている。

矢吹原の丘陵部は白河ローム層(鈴木：1968)と呼ばれる降下火山灰によって直接覆われ、これに対して台地部ではDⅠ層の上に郡山層と呼ばれる泥・砂・礫などがあり、ラミナの発達した水成堆積物が覆い、その上に白河ローム層が堆積している。

気候：矢吹町は東西を山地に囲まれているため、日照時間は較差があり、内陸性気候で降雨量も少ない。1年の平均気温は11度前後で、夏は比較的高く、冬はあまり寒くない。

植生は落葉広葉樹を主とする温帯林に属している。

### 第2節 名代A遺跡の歴史的環境

矢吹地方の歴史は旧石器時代まで逆のぼり・三城目の陣ヶ岡遺跡・成田遺跡からは、真岩を用いた石刃技法により製作されたナイフ形石器が発見され、成田型刃器の標的遺跡となっている。

縄文時代は最後の氷河期が終わった1万年前ころから気候が温暖となり、それにつれて、土器の発明による新しい文化が生みだされた。縄文土器と呼ばれる縄目のついた特徴のある土器の出現と、磨製石器や石鏃などの石器類も作られ、多様化してくれる。それに阿武隈川を遡る鮭・鱒などの魚労によって、縄文人の生活範囲は拡大し、これにつれて遺跡は阿武隈川流域から山間部にまで分布している。

## 第1章 第2節名代A遺跡の歴史的環境

弥生時代：この時代、東日本の文化は稲作を中心とした農耕と石器を使用していたが、西日本では金属器が波及し用いられている。矢吹近辺では、白河市天王山遺跡、須賀川市弥六内遺跡、石川町鳥内遺跡、泉崎村踏瀬大山遺跡などがある。須賀川市弥六内遺跡は、弥生時代後期の竪穴住居26軒が検出された、東北地方有数の大遺跡である。

古墳時代：この時代に入ると矢吹地方にも巨大な古墳がつくられるようになる。鬼穴古墳、谷中古墳などがあり、特に谷中1号墳からは円筒埴輪が発見されている。昭和50年の範囲確認調査によると、長軸、約50mの前方後円墳であることが推定されている。また鬼穴古墳は阿武隈川を見下ろす台上にある巨大な古墳である。

律令時代：大化の改新により矢吹地方は、道奥国、白河郡となり、畿内にあった大和朝廷の支配下に組込まれた。その後養老2年(718)には石背国に属したが、間もなく陸奥国に統合された。白河郡は17郷を有する大郡で、郡衙は、郡の中心とされる泉崎村の関和久遺跡に置かれた。これを支配した白河郡司は文部老一外正五位一神護景雲3年(769)、大領外七位上奈須直赤竜一嘉祥元年(848)一などに阿倍陸奥臣を賜ったという記録がある。

この律令時代に当る奈良・平安時代の遺跡は多く発見されており、矢吹町内には約80ヶ所に及んでいる。

この時代の公道とされる山道は、福島県内は阿武隈川の西岸に通じていたと推定され、県内には7ヶ所の駅と3ヶ所の伝馬が置かれた。その遺跡を想定すれば、駅馬は、雄野、松田、磐瀬、葦屋、安達、湯日、岑越、伊達、篤借の9ヶ所である。また駅伝は白河、安積、信夫の3ヶ所である。

### 石背国府と支配下の郡

養老2年石背国が設置され、その国府が石背郡、石背郷に置かれた。国指定史跡の「上人坦魔寺跡」である。この遺跡は、石背国府正庁跡と想定されている。これに伴う石背国の郡名は、白河郡、安積郡、信夫郡、会津の5郡からなっている。

白河郡は古記録によれば、陸奥国で一番大きな郡で17郷を有した大郡に位置付けられている。これらの郷名は、大村郷、丹波郷、松田郷、入野郷、鹿田郷、石河郡、長田郷、白川郷、小野郷、駅屋郷、松戸郷、小田郷、藤田郷、屋代郷、常世郷、高野郷、依上郷からなっている。

### 行方原

今三城目、矢吹より中畑、滑津へ渉る平野の旧名なり。真東限、南限は、逢隈川に至り、西限は、関和久、泉崎、大和久の辺に至るごとし。古簡に、石川庄行方野とも云ひ、此辺は近世まで、石川郡の管内なりしなり、北は岩瀬郡鏡沼に渉る。

『白河風土記』と『地名辞書』の説をあわせて、広く解釈すれば、行方野は矢吹町を中心に鏡石町から中島村に及ぶと考えるとよいであろう。「行方の原」あるいは「行方野」は、『大日本地



第1章 第2節名代A遺跡の歴史的環境

下 荒 具 A	中畑字中畑	畑	散布地	弥 生	土師を含む			
〃 B	〃 字根宿	畑	住居址	土 師	48・3・10発掘			
〃 C	〃 字根宿	畑	散布地	縄 文	縄文 くぼみ石 38			
下 荒 具 古墳	〃 字根宿	山林	古 墳		48.3.10発掘			
鉢 内	〃 字根宿525～537	畑	住居址	土 師	土師Ⅲ・須恵器を含む			
地 極 山	〃 字中畑152・382	畑	散布地	土師・須恵				
北 原 経 塚	〃 字根宿152～255	畑	散布地	土 師	須恵・磨製石斧			
森 錦	〃 字根宿	山林	経 塚		一字一石経			
森 郭	〃 字中畑549～744	畑	住居址	土 師	土師Ⅲ～Ⅴ			
森 郭	〃 字中畑777・790	畑	住居址	土 師	土師Ⅵ（墨書銘）			
国 神	〃 字国神109・124	畑	住居址	土 師	製鉄址・祭祀址・土製曲玉・48.3			
か に 沢	〃 字国神283～3011	畑	散布地	土 師	住居址・祭祀址・土製曲玉・48.3			
越 中 山 1	字国神472	畑	散布地	土 師	布目瓦・銅鬼 48.3.1発掘			
越 中 山 2	〃 字国神	畑	集落址	縄 文	中期土器・石鏡皮はぎ			
萱 山	字国神442	水田	散布地	土 師				
谷 地	字 字国神814	畑	散布地	弥 生	土師・須恵含む南勝山武石・菅玉・開田			
林 山 崎	〃 字国神417・420	水田	住居址	縄 文	前期土器・土師・河川改修			
花 山	〃 字鍋内51～61	畑	散布地	土 師	縄文・須恵・石棺・開田			
鍋 内	字 字鍋内122・190	畑	散布地	土 師	須恵含む			
柳 古墳群	字鍋内34・149	山林	古 墳	土 師	須恵含む			
寺 内 古墳	〃 字寺内	畑	散布地	土 師	円墳			
愛 久 下	〃 字鍋内86・94	畑	散布地	弥 生・土師	縄文・石鏡			
大 丹 池	〃 字大久保35・個48	畑	散布地	土 師	縄文・弥生含む			
陣 荷 釜	〃 字大久保・弥栄	畑	散布地	土 師	弥生・須恵含む			
稲 崎	〃 字一本木446	畑	包含地	弥 生・土師	縄文・須恵	36改修		
松 崎	〃 稲荷釜	畑	散布地	土 師	縄文・須恵	35開田	30	399
柏 山	〃 松崎	水田	散布地	土 師	弥生・須恵・石鏡			
北 山 釜	〃 柏山	畑	包含地	縄 文・土師	弥生・須恵	開田	30	418
坂 西 古墳群	〃 字坂西	山林	古 墳	弥 生・土師	縄文・石鏡			
七 軒 池	大畑字大橋	畑	散布地	土 師	円墳			
赤 淵	松倉字松倉742	山林	住居址	土 師	鉄釘	51工事誘致		
城 代	神田字神田東626	畑	散布地	弥 生・土師				
岡 ノ 内	〃 字神田南	畑	散布地	土 師				
前 谷 中	〃 字神田東	畑	住居址	土 師	須恵器を含む			
鬼 穴 古墳群	〃 字神田東	畑	古 墳	土 師	石製模造品（鏡）			
谷 中 古墳群	〃 字神田東	山林	古 墳	土 師	加輪 鉄鏡、刀子、鏃、正・44・7副 土師遺物改善子・2号墳未子			
小 又	須乗字小又	畑	包含地	縄 文	鉄鏡、加輪、金環4・7副 1号墳調査後・2・3号墳未子			
陣 三 城目字陣ヶ岡	三城目字陣ヶ岡	山林	散布地	旧 石 器	成田型刃器鏡石町成田にまたがる			
吉 作	〃 字吉作	畑	散布地	土 師				
後 原	〃 字谷中72・82	畑	集落群	土 師				
久 当 山古墳群	〃 字奉行塚	山林	古 墳	土 師	横穴			
塚 越 古墳	〃 字塚の越	山林	古 墳	土 師	墳			
弘 法 山古墳群	〃 字奉行塚	山林	古 墳	土 師				
塚 原 古墳	中野目字塚原	山林	古 墳	土 師	前方後円墳・鏡・石棺			
沼 和 古墳群	明新字沼和久	山林	古 墳	土 師	横穴式			
甲 三 三 段古墳	〃 字甲三三段	山林	古 墳	土 師	円墳			
乙 江 沢	〃 字乙江沢	畑	散布地	土 師				
屋 敷 耕地前	〃 字屋敷前	畑	散布地	土 師				
西 原	〃 字西原	水田	縄 文	縄 文	石器含む	開田	30	440
谷 地 向	大畑字大畑188	畑	散布地	土 師				
深 町	〃 字住吉189・193	畑	散布地	土 師				
戸 根 山	〃 字上1前316	畑	散布地	土 師				
根 山	〃 字前久保158・164	畑	散布地	土 師				

## 第2章 第1節調査に至る経過

赤羽下	大畑字赤羽下	水田	散布地	土	師	36開田		
沢尻	〃字沢尻	畑	散布地	土	師			
大蔵山古墳群	〃字前久保	山林	古墳			37・開田	38	27
七軒1	松倉字松倉727・741	畑	散布地	土	師			
上原山	〃字松倉239・241・491	畑	散布地	土	師	38	30	
新池	〃字松倉666～671	畑	散布地	土	師			
向原	〃字諏訪清水160	畑	散布地	縄	文	弥生・土師	畑	
阿部	〃字諏訪清水244	畑	散布地	土	師			
宮前	〃字諏訪清水 <sup>419</sup> <sub>421</sub>	畑	散布地	土	師	須恵・石鏃	畑	
諏訪清水	〃字諏訪清水 <sup>419</sup> <sub>420</sub>	畑	散布地	土	師			
北山	〃諏訪清水333	畑	散布地	土	師	弥生含む		
向井	〃字上敷面	畑	散布地	土	師			
堀ノ内	〃字上敷面	畑	散布地	土	師	弥生・土師	須恵	
白松山	〃字上敷面50面	畑	散布地	土	師			
若宮山	〃字上敷面13～18	畑	散布地	土	師	須恵		
小池	〃字糺久保	畑	散布地	土	師			
申久保	清水塚368～377	畑	散布地	土	師	須恵	38	
金屋古墳群	〃字清水塚	山林	古墳					円墳
清水塚古墳群	〃字清水塚 <sup>261</sup> <sub>271</sub>	山林	古墳			円墳	28	
清水塚古墳群	〃字清水塚	畑	散布地	弥	生			土師

## 第2章 調査経過

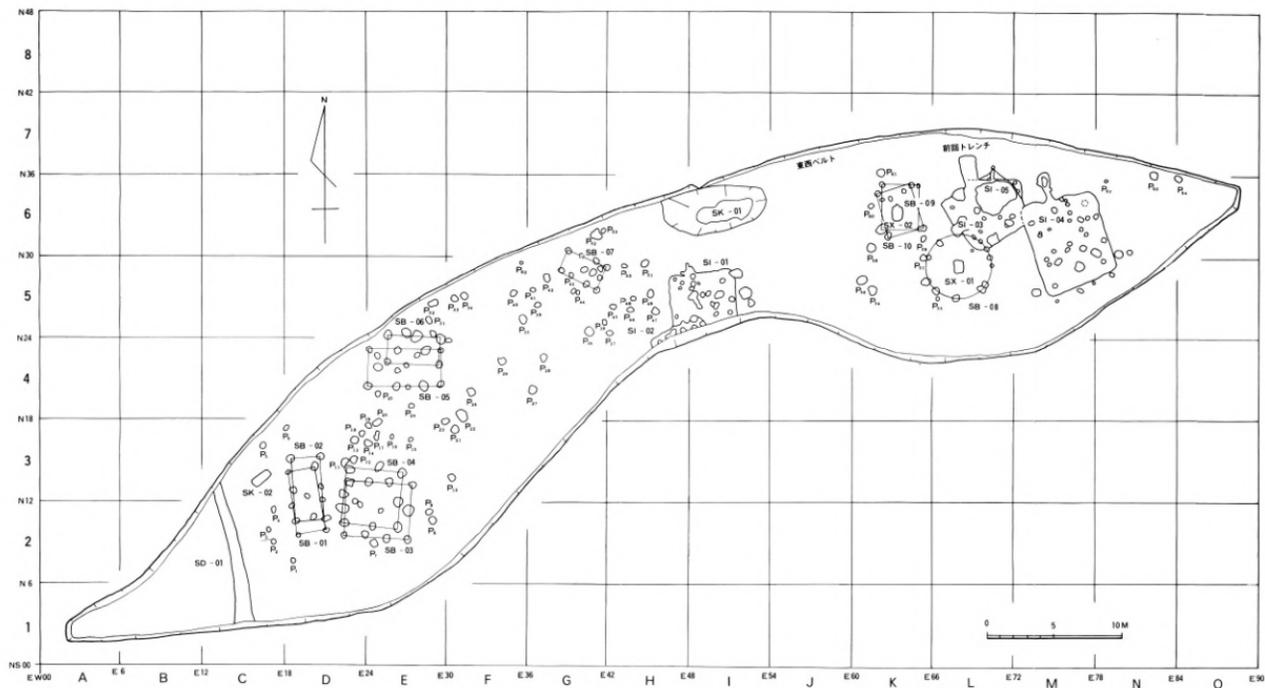
### 第1節 調査に至る経過

矢吹町明新原地内には、奈良・平安時代の集落跡である名代遺跡があることが確認されていた。ここにゴルフ場建設のための開発工事を行う予定となり、名代遺跡の現状保存が困難であると認められるので文化財保護法に基き、昭和57年予備調査を行った結果、遺構のあると思われる地域（明新原80番地 1410㎡）を、平成元年2月1日から、調査担当者、永山倉造氏（日本考古学協会員、元須賀川市立博物館学芸員）の指導により、矢吹町教育委員会が、地元の仕事員の協力を得て発掘調査を行った。

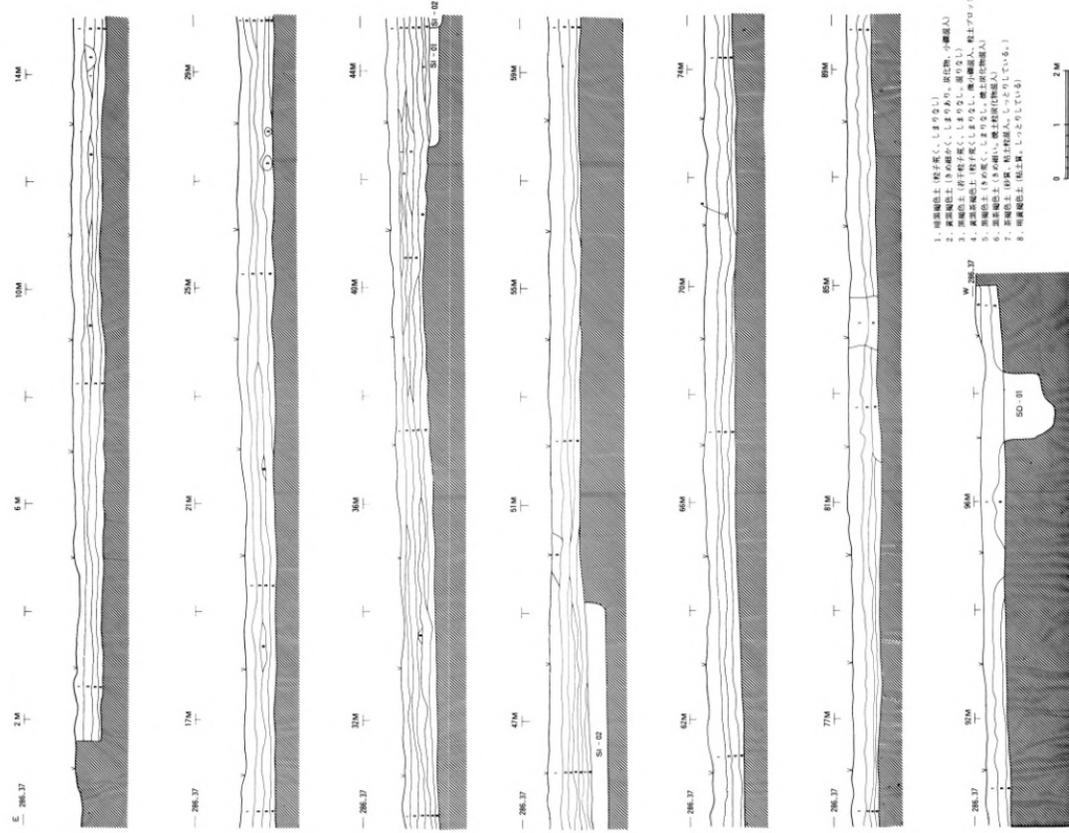
### 第2節 調査日誌概要

- 2月13日（月） 本日より名代A遺跡発掘調査区を重機で、表土除去作業開始。
- 14日（火） 遺跡南端側を東西に巾50cmのベルトとして残し、重機にて東部より表土除去作業中、南東部に土師器片数点出土。出土状況を写真撮影。
- 15日（水）～20日（月） 東西ベルトの北面セクションの精査作業並びに撮影作業。遺跡中央の南部に落ち込みを確認、掘り込み作業開始。

第2図 遺跡全測図



第3図 東西ベルト北面断面図



## 第2章 第2節 調査日誌概要

- 21日(火) 基準杭を設定する。東西ベルトの北面セクション実測開始。  
中央南部の落ち込みは住居跡と確認、S I-01とする。  
削平作業中、南東部2ヶ所より、接合可能な土師器片数点かたまつて出土。  
出土状況を写真撮影。
- 22日(水) 南東部に落ち込みを確認、掘り込み作業開始。  
表土除去作業と遺構確認面の精査作業中、北部に柱穴が多数、確認される。
- 23日(木) 本日にて、重機による表土除去作業を終了する。
- 3月1日(木) 6mのグリットを設定する。  
G-4~H-5・6グリットより検出した柱穴群の半裁作業。
- 3日(金) C-1・2・3グリットより、溝状遺構が検出。SD-01とする。
- 6日(月) L・M-5・6グリット(南東部)の落ち込みは、切り合っている住居跡  
と確認された。S I-03・04として掘り込み作業開始。  
F-3・4・5~E-2・3・4グリットより検出の柱穴半裁作業。
- 7日(火) 柱穴のセクション実測開始。SD-01の掘り込み作業開始。
- 9日(木) S I-01のセクション実測開始。  
SD-01の掘り込み作業終了。S I-01の東壁付近に炭、焼土、土器片数  
点検出。S I-01の南西壁を切つて落ち込みを検出、住居跡と確認し、  
S I-02とする。掘り込み作業開始。
- 10日(金)~11日(土) S I-03確認面に、焼土と多量の土師器片を検出。注意深く掘  
掘り下げ作業開始。SD-01のセクション実測並びに写真撮影開始。
- 13日(月) S I-01・02の掘り込み作業を終了し、精査して写真撮影。  
L-5グリットに長方形の地床炉らしき遺構が検出さる。SX-01とす  
る。
- 14日(火) S I-04の掘り込み作業を終了し、精査する。  
SX-01の半裁作業。  
S I-03の掘り込み作業開始。
- 15日(水) 柱穴群の写真撮影。  
SX-01付近に柱穴を検出し、掘り込み作業開始。
- 16日(木)~17日(金) SD-01の掘り込み作業を終了し、平面実測に入る。  
S I-04のセクション写真撮影。
- 20日(月) 柱穴群の実測終了。  
S I-03のセクション実測開始。

## 第2章 第2節 調査日誌概要

S I-01・S X-01の平面実測開始。

S I-03検出の土器類の出土状況を平面実測開始。

22日(水)～24日(金) 柱穴群の掘り込み作業開始。

S X-01の平面実測終了。

S I-03のセクション実測終了後、精査作業に入り、平行して平面実測開始。

27日(月)～29日(水) S I-04の平面実測開始。

H・I-6グリットに楕円形状の粘土質が検出されたので、1m×3mのトレンチを設定し、掘り込み作業開始。S K-01とする。

K-6グリット付近に、新たに長方形の地床炉らしき遺構を検出。S X-02として、掘り込み作業開始。

30日(木)～4月1日(土) S I-01・02の柱穴エレベーション実測。

柱穴群の平面実測開始。

S I-04の平面実測開始。

4月3日(月)～5日(水) S K-01、トレンチ壁面セクションの実測開始。

C-3グリットに深く掘り込める大型ピット状遺構を検出。S K-02とする。

7日(金) S X-01・02の平面実測開始。

遺構全体の精査及び清掃をもって、作業員による検出作業を終了する。

10日(月)～(水) S I-03・04の柱穴エレベーション実測、並びに建物跡(S B)と考えられる柱穴の平面実測。

13日(木) 平板実測。

14日(金) 遺跡全体の写真撮影。

15日(土)～19日(水) S K-02の掘り込み作業を終了し、写真撮影。並びにエレベーション、セクション、平面の実測。遺構全部の平面図等のチェック作業。

20日(木) 本日をもって、発掘調査を終了する。

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 竪穴住居跡

#### 第1号住居跡（S1-01）（第4図、第3・第4図版）

〔検出状況〕 H・1-5～H-5・6グリットにかけて第1号住居跡と第2号住居跡が切り合って検出された。

遺跡全体は東西に長く、南側より以南は約2m程の急な落差をもって一段下に、調査区外の耕作田が広がっており、第1・2号住居跡遺構の全体を検出できなかった。又、一時期の土砂崩れによる破壊もあり、流れ込んだ堆積土によって分かりにくく、遺構検出作業は非常に困難を要した。

〔プラン・規模・方向〕 東壁の一部と南壁は現存せず、西壁は第2号住居によって切られる形をなすが、北壁の長さが4m80cm、東壁は3m50cm残存、西壁は3m70cm残存を測る隅丸方形のプランを呈するものと思われるが、全体の規模は不明である。

中心線は南北軸方向N-4-Wを示す。

〔壁・床面〕 壁の上部は崩れによる破壊と堆積により不明であるが、残存壁高は、西壁12cm、東壁8cm、北壁23cmを測る。西壁は直角に近い立ち上がりを呈し、東壁、北壁は若干ゆるやかな立ち上がりを呈する。

床面は黄褐色の粘土層を直接踏み固めて、ほぼ平坦に構築されている。床面北東壁付近には焼土が広がっており、土器片も数点出土した。

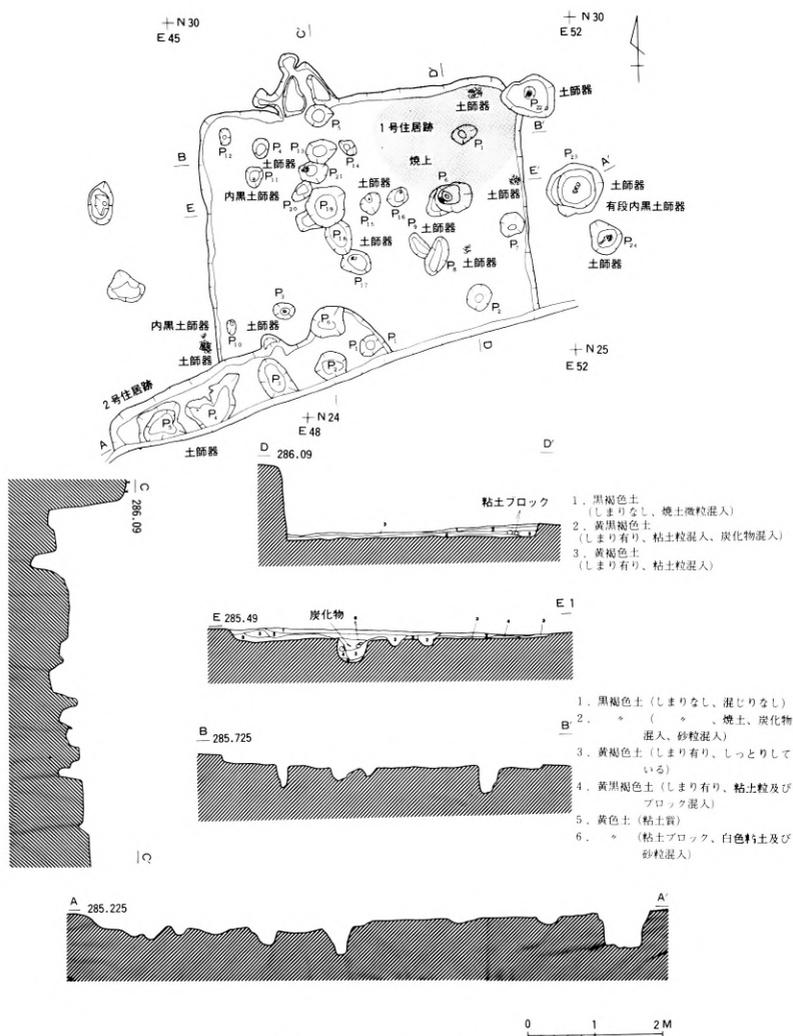
〔覆土〕 大別して4層に分けられる。1層は黒褐色土で混じりなく、しまりもない。2層も黒褐色でしまりないが、砂粒を含み、焼土、炭化物も混入している。3層は黄褐色土でしっとりとし、しまりがあり遺物も包含されている。4層は黄褐色土でしっとりとし、しまりがあり、粘土粒、粘土ブロックが混入している。

〔カマド〕 北壁中央より西に位置して構築されていると思われるが、破壊により遺存部はわずかで、全体の構造は明らかにし得ないが、両袖の一部と燃焼部の一部が残るのみである。焚口中央部に柱穴状ピット遺構が検出されたが、土器類は出土していない。

〔ピット〕 床面上にピットが21個検出された。柱穴と考えられるピットで、土師器片が出土しているのは、P<sub>3</sub>から2片、P<sub>6</sub>から1片、P<sub>7</sub>から1片、P<sub>16</sub>から1片、P<sub>17</sub>から3片、P<sub>21</sub>から12片、(土師片18点、内黒土器2点)である。

P<sub>1</sub>は上面径36cm×24cm、深さ43cm、P<sub>2</sub>は上面径36cm×38cm、深さ38cmを測る円形を呈する。P<sub>3</sub>は上面径30cm×21cm、深さ28cm、P<sub>5</sub>は上面径26cm×30cm、深さ37cmで楕円形を呈する。柱

第3章 第1節 竪穴住居跡



第4図 第1号・第2号住居跡

### 第3章 第1節竪穴住居跡

痕は検出されないが、断面観察と位置的にみて主柱穴と考えられる。

P<sub>11</sub>は上面径72cm×45cm、深さ42cmを測り、楕円形で土師器片が6点出土している。床面を掘り込んだと考えられる状況を呈する為、貯蔵ピットと考えられる。

P<sub>19</sub>は上面径61cm×60cm、深さ48cmを測る円形を呈する。その形状からいって貯蔵ピットと考えられる。

住居跡外より検出されたピットは、北東角の壁にかかって、P<sub>22</sub>は上面径80cm×63cm、深さ18cm測る。楕円形を呈し、東壁付近にP<sub>23</sub>、P<sub>24</sub>で、P<sub>23</sub>は上面径85cm×86cm、深さ55cm、底部は、ほぼ平な円形を呈し、やや大型ピット内よりピット内より土師器片が3点出土。内1つは有段丸底の内黒の杯(第5図、第12図版)である。焼土、炭化物も検出された。P<sub>24</sub>は上面径45cm×53cm、深さ23cm。不整形円形を呈し、内黒土師器片1点を含む12点の土師器片が出土している。

[遺物] 第1号、第2号住居跡の遺構確認面、住居跡床面、住居跡内外及び付近、柱穴、ピット内より土師器、須恵器片が合計219点出土しているが、いづれも復元できなかった。が図上復元実測の出来たものは、(第5・6図、第12図版)と28点である。

鉄製品(第7図、第13図版)が1点、土製器(第7図、第12図版)が1点、ふいご(第7図、第12図版)が1点出土している。

#### 土師器(第5図・1～16、第6図・1～10、第12図版)

##### 杯(第5図・1～16)

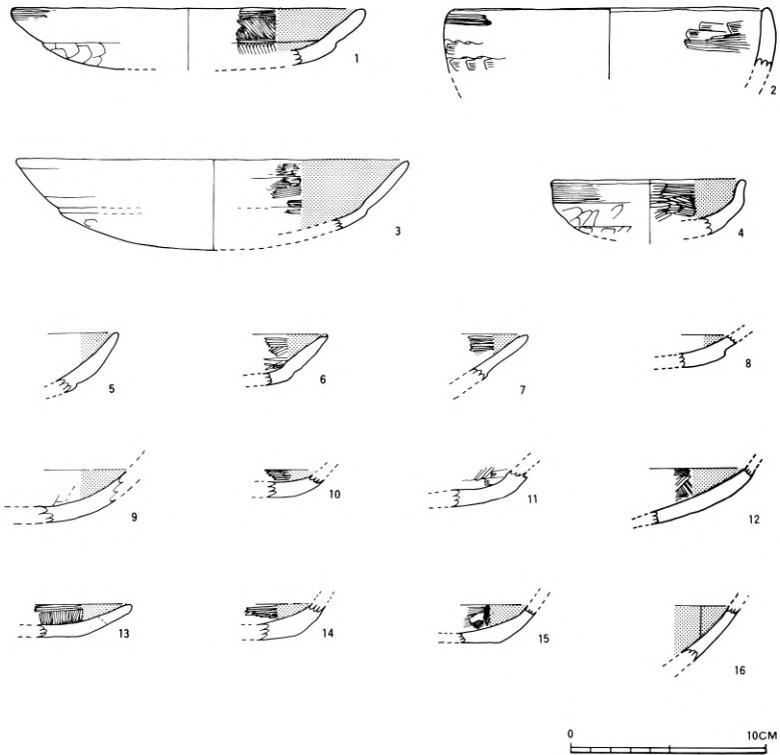
(1)は口縁部から底部の破片を図上復元実測した。体部に段を有し、内湾して口縁部に至り、丸底と思われる。外面口縁部に横ナデ、底部に手持ちヘラケズリが見られ、内面は黒色処理の後、他方向のミガキが施されている。器肉は厚く、推定口径18cmを測る。

(2)は碗型土器であろう口縁部を図上復元実測した。体部は丸味をおびて内湾して口縁部へ至る。内面はわずかに巻上げ痕が残り、手持ちヘラ調整とヘラミガキが施され、外面は手持ちヘラ調整とヘラミガキで丁寧な仕上げである。内外面共黄灰茶褐色を呈し、胎土は緻密で焼成も良好である。器肉はやや厚く、推定口径16.2cmを測る。

(3)は口縁部から底部にかけて約 $\frac{1}{3}$ 残存の破片を図上復元実測した。体部に段を有し、外傾して口縁部に至り、丸底と思われる。外面は横ナデと底部に手持ちヘラケズリ痕が若干残る。内面は黒色処理の後、横方向のミガキとナデが施されている。器肉は薄く、胎土は粒子が荒い。推定口径は19.8cmを測る。

(4)は口縁部から底部にかけて約 $\frac{1}{3}$ 残存の破片を図上復元実測した。体部中央に明瞭な稜を有し、内湾気味に立ち上がり、口縁部へ外傾する型を呈する。外面口縁部に横ナデ、底部に手持ちヘラケズリ、内面は黒色処理の後、ヘラミガキが施されている。器肉は厚く推定口径9.8

第3章 第1節 竪穴住居跡



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

cmを測る。

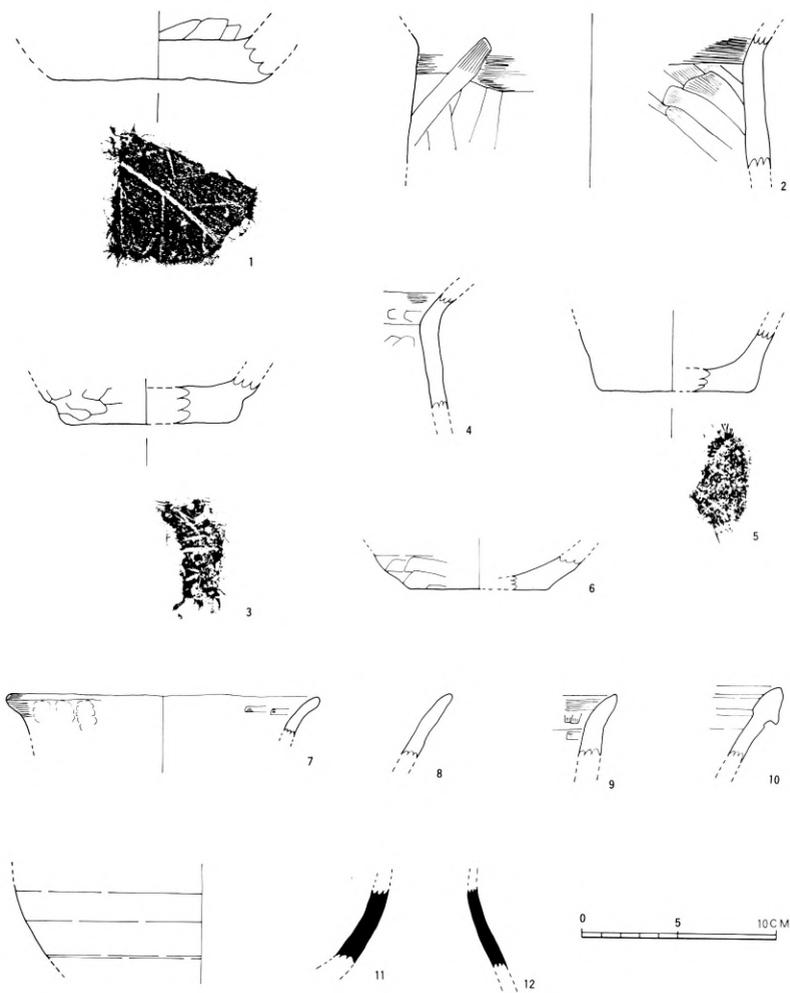
(5・6・7・8)はいづれも体部に段を有し、内面が黒色処理の後、ヘラミガキが施されている、丸底を呈すると思われる杯の破片である。

(9・10・12)は丸底で、体部と底部の境が明瞭でない、内湾した型を呈すると思われる杯の破片である。いづれも内面に黒色処理が施され、ミガキが見られる。

(11)は体部の段を有する部から破損の丸底であろうと思われる破片である。

(13・14・15)は平底風丸底であろうと思われる杯の破片である。内面は黒色処理の後ミガ

第3章 第1節 豎穴住居跡



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図

### 第3章 第1節竪穴住居跡

キが施されている。

(16)は内外面共黒色処理が施されている杯の体部の破片である。

#### 甕 (第6図・1~10、第12図版)

(1・3・5・6)は甕の底部の破片を図上復元実測した。1・3・5は底部に木の葉様痕が残り、器肉が厚く、手持ちヘラケズリの痕が見られる。16はやや薄手の底部の破片であり、手持ちヘラケズリ痕が残る。推定底径1は11cm、3は9cm、5は8cm、6は7cmを測る。

(2・4)は頸部から体部にかけての破片である。どちらも器肉は薄く、頸部に横ナデが見られ、体部はヘラケズリとヘラ調整が見られる。2の推定頸径は16.5cmを測る。

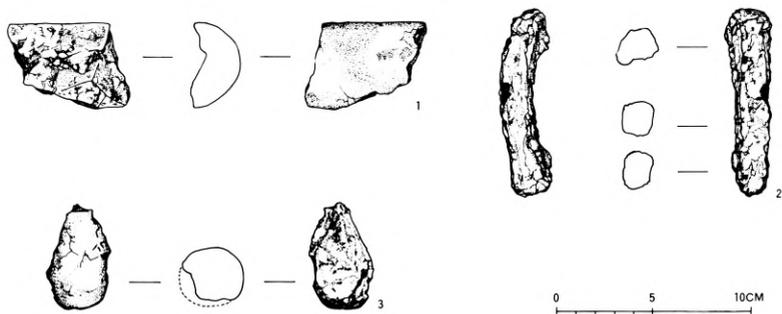
(7・8・9・10)は口縁部だけの破片である。7は器肉が薄く、横ナデとヘラ調整が施され、指母痕が若干残る。推定口径は12.4cmを測る、8・9は横ナデとヘラ調整がわずかに残る。10は外頸部にヘラ調整の沈線と、口唇部、頸部に横ナデが観察されるロクロ形成の破片である。口縁部は外傾し、折り返し耳の型を呈する。内外面共白橙褐色を呈する。

#### 須恵器 (第6図・11・12、第12図版)

##### 壺 (第6図・11・12)

(11)は体部下端約1/3残存の破片を図上復元実測した。器肉の厚味と形状から見て、壺形を呈するものと思われる。外面上部に明灰色の自然釉、内面上部に灰黒色の自然釉が観察される。ロクロ成形による。推定最大胴径18.2cmを測る。

(12)は頸部の付近、肩の部分の破片であろうと思われる。内外面共、人工的に灰釉が全体に観察される。ロクロ成形による。



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図

### 第3章 第1節竪穴住居跡

#### 土製品 (第7図・1～3、第12図版)

ふいご (第7図・1) 住居跡の外、カマド付近から出土した破片である。明橙褐色を呈し、一部に黒色に変化を見る。胎土は緻密で、長さ5.3cm、巾4.4cmを測る。円筒型を呈す。

(3) は長さ5.6cm、径3.5cmを測る、先が丸味を帯びた棒状を呈し、明赤橙褐色の胎土で、表面が黒色の用途不明の土製品である。

#### 鉄製品 (第7図・2、第13図版)

(2) は長さ9.5cm、巾が1.8cm～2.4cmで、一辺が約1.8cmの長方形の立方体を呈す。ただし、若干の湾曲を見る。腐蝕が激しく、原形の復元が不可能で、用途不明の鉄製品である。

#### 第2号住居跡 (S1-02) (第4図・3、第4図版)

[検出状況] H・I-5～H-4グリットに第1号住居跡の西壁を切って検出された。第1号住居跡の西壁を検出中、途中で壁の境が不明となり、黒い落ち込みに変わり、掘り込んでゆくと、西南方向へ壁が検出された。又、第1号住居床面より約20cm程下がって床面が検出され、第2号住居の方向性も確認された。

[プラン・規模・方向] 北壁4m20cm、東壁は90cmまで、西壁は50cmまでを測るが、南壁は崩れによる破壊と、調査区外に入るため、全体のプラン及び規模は不明である。

中心線は、南北軸方向、N-23°～25°-Wを示すと考えられる。

[壁・床面] 北・西壁共に、20cm程の壁高を測り、ゆるやかな立ち上がりを呈す。

床面は、黄黒褐色を掘り込んで構築されているが、あまり踏みかためられた痕跡はなく、遺存状態が悪い。

[覆土] 土砂崩れにより、明確に記録することができなかったが、軟かい砂質を含む黒茶褐色土と黄黒褐色の堆積土であることだけ確認された。

[ピット] 床面よりピットが6個検出された。P<sub>0</sub>は上面径57cm×50cm、深さ45cmを測る不整円形で、住居内では最深のピットである為、貯蔵ピットとも考えられる。P<sub>1</sub>は上面径33cm×27cm、深さ17cmの不整円形、P<sub>2</sub>は上面径47cm×42cm、深さ26cmの不整円形、P<sub>3</sub>は上面径54cm×44cm、深さ27cmの楕円形、P<sub>4</sub>は上面径99cm×44cm、深さ12cmの不整形、P<sub>5</sub>は上面径63cm×47cm、深さ18cmの不整形を呈する。いずれも破壊が著しく、明確なピットは検出できなかったが、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>はかろうじて柱穴とも考えられる。P<sub>4</sub>のピット内より土師器片が1点出土している。

[遺物] 第1号、第2号の住居跡の遺構確認面、住居跡床面、住居跡内外及び付近、柱穴、ピット内より合計219点出土しているが、いずれも復元不可能な破片である。

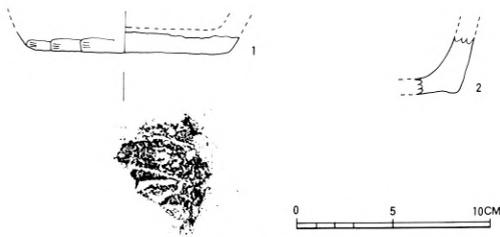
### 第3章 第1節竪穴住居跡

#### 土師器 (第8図・1、2)

##### 甕 (第8図・1、2)

(1) は底部の約 $\frac{1}{4}$ の破片を図上復元実測した。外面に横方向のヘラ調整が施され、木葉痕が見られる。焼成は堅緻であるが胎土は荒い。推定底径10cmを測る。

(2) は体部下端より底部にかけての破片である。内面のヘラ調整が沈線として4本残る。内外面共、色調は明黄橙褐色を呈す。



第8図 第2号住居跡出土遺物実測図

#### 第3号住居跡 (S1-03) (第9・10図、第3・4図版)

[検出状況] L-6・7～M-6・7グリットにかけて、第4号住居跡と第5号住居跡が切り合って検出された。

遺構の境界線が不明瞭で、確認に手間どったが、表土を除去作業中、土師器 (第11図、第10図版) が出土しており、遺構があるであろうと予測はしていたが、掘り込んでゆくと一面に焼土が広がって検出された。その為、注意深く作業を進めると、遺物が多量に散らばり、広がって出土した。

[プラン・規模・方向] 南東壁の角は第4号住居跡で切られており、東壁は3m60cm、南壁は3m90cmを測り、西壁は4m30cm、北壁は4m60cmを測る、やや不整な隅丸方形プランを呈する。

規模は床面積が約19.78㎡を測る。

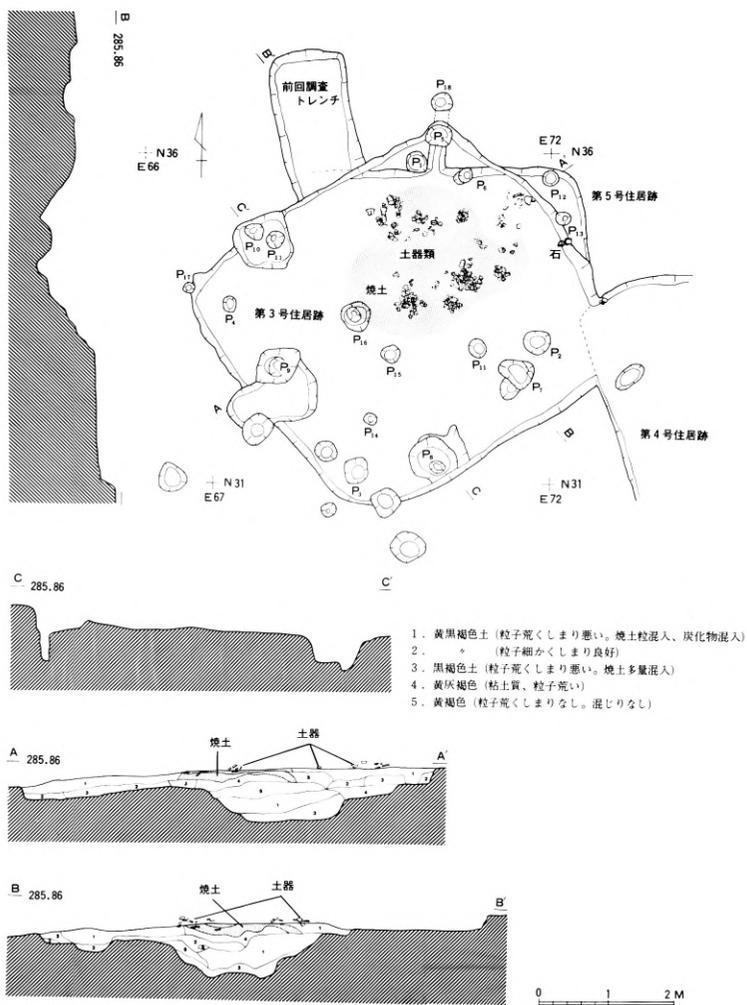
中心線は南北軸方向、N-35°-Wを示す。

[壁・床面] 第4、第5号住居跡との重複によって北壁の北東部と、北東部の東壁の一部は明瞭でないが、北壁は18cm、南壁は23cmを測り、急な立ち上がりを呈する。東壁は17cm、西壁は22cmを測り、ややゆるやかな立ち上がりを呈する。

床面は厚さ約18cmの粘土質を敷き、踏み固めて、やや南下がりに構築されており、貼り床と考えられる。又、北東部一面に焼土が検出されている。

[覆土] 床面より上層部は、黄黒褐色土と、黒褐色土の自然堆積に、貼り床である粘土層が

第3章 第1節竪穴住居跡



第9図 第3号、5号住居跡

### 第3章 第1節竪穴住居跡

1層加わり、床の下層部に黄灰褐色土と黄褐色土の2層で、5層に大別される。

〔カマド〕 確認できなかった。

〔ピット〕 住居跡内外に18個のピットを検出した。

P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>12</sub>、P<sub>13</sub>、P<sub>14</sub>においては、第5号住居跡に伴うものと考えられるが、第3号住居跡での検出ピットとして説明する。

P<sub>1</sub>は上面径32cm×33cm、深さ38cm、P<sub>2</sub>は上面径38cm×36cm、深さ36cm、P<sub>3</sub>は上面径37cm×37cm、深さ34cm、P<sub>4</sub>は上面径23cm×25cm、深さ32cmを測る。その形状、断面観察と位置的にみて、主柱穴と考えられる。

P<sub>5</sub>は上面径36cm×31cm、深さ21cmを測るが、第5号住居跡のカマド煙道部の途中に位置する。

P<sub>7</sub>は上面径65cm×51cm、深さ21cm、P<sub>8</sub>は上面径83cm×66cm、深さ62cm、P<sub>9</sub>は上面径77cm×55cm、深さ37cm、P<sub>10</sub>は上面径25cm×28cm、深さ53cm、P<sub>11</sub>は上面径27cm×26cm、深さ43cm、P<sub>15</sub>は上面径43cm、深さ33cmを測り、以上の各柱穴は、垂直に近く掘込まれた、明瞭な掘り方を持つ為、掘立柱建物跡としての可能性もあるが、相対する柱穴が確認できず、掘立柱建物跡とは断定せず、第3号住居跡内のピットとして説明した。

〔土坑〕 住居跡内の焼土の下に、貼り床が検出され、その中の柱穴を掘り下げたら、床である粘土層の下に黒い落ち込みを確認、最大上面径約2.8m×2.5mを測る大型土坑である。第5号住居跡に伴う遺構とも考えられるが、用途不明である。

〔遺物〕 住居跡北東部に復元可能なものから破片まで数えて306点と多量に出土した。

第3号、5号住居跡は切り合い、重複関係にあり、どちらの遺構からの出土か判別しにくく、第3号住居跡からの出土として報告する。

復元できたものは、土師器で小型の杯と大型の鉢の2点だけである。

土師器では大型甕の底部、体部、口縁部と、木葉痕の見られる甕の底部、壺型土器、内黒の杯（段を有するものも含む）が出土しているが、いずれも破片であって、図上復元実測をした。

その他、石が3点と、土製品が1点出土している。

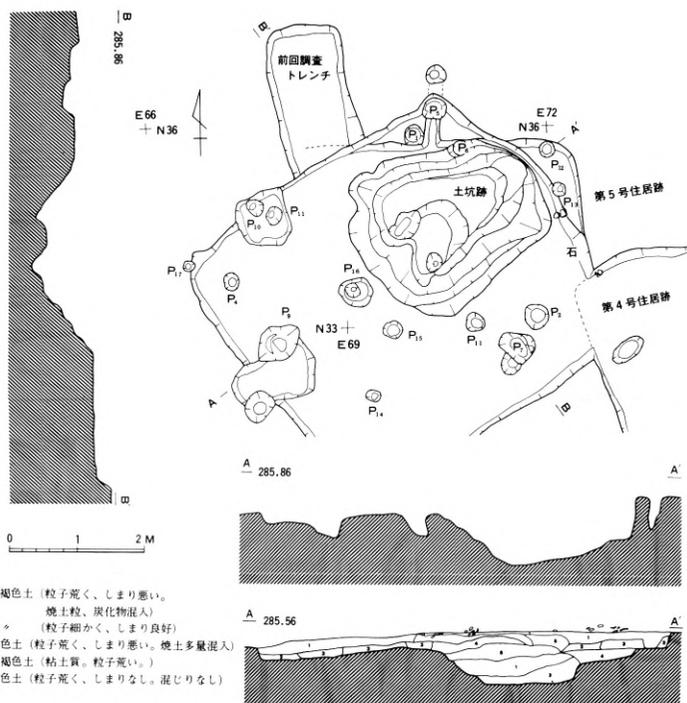
#### 土師器（第11図・1～7、第12図・8～16、第13・14図版）

##### 杯（第11図・1～2）

（1）は杯の破片で、外面の一部に有段が見られる。小片により充分な観察は出来ないが、外面は横ナゲ、内面は黒色処理が施され、丁寧なヘラミガキが観察される。

（2）は底部と口縁部約1/3残存を復元実測した。底部はほぼ平で、体部へ向って丸味をおびて立ち上がり、内湾気味に口縁部に至る。内外面共、上半分に巻き上げ痕、下部にヘラケズリ

### 第3章 第1節 竪穴住居跡



第10図 第3号住居跡内土坑

痕が観察される。器肉はやや厚手である。推定口径8.2cm、器高4.7cmを測る。

#### 甕 (第11図・3～7、第12図・8～16)

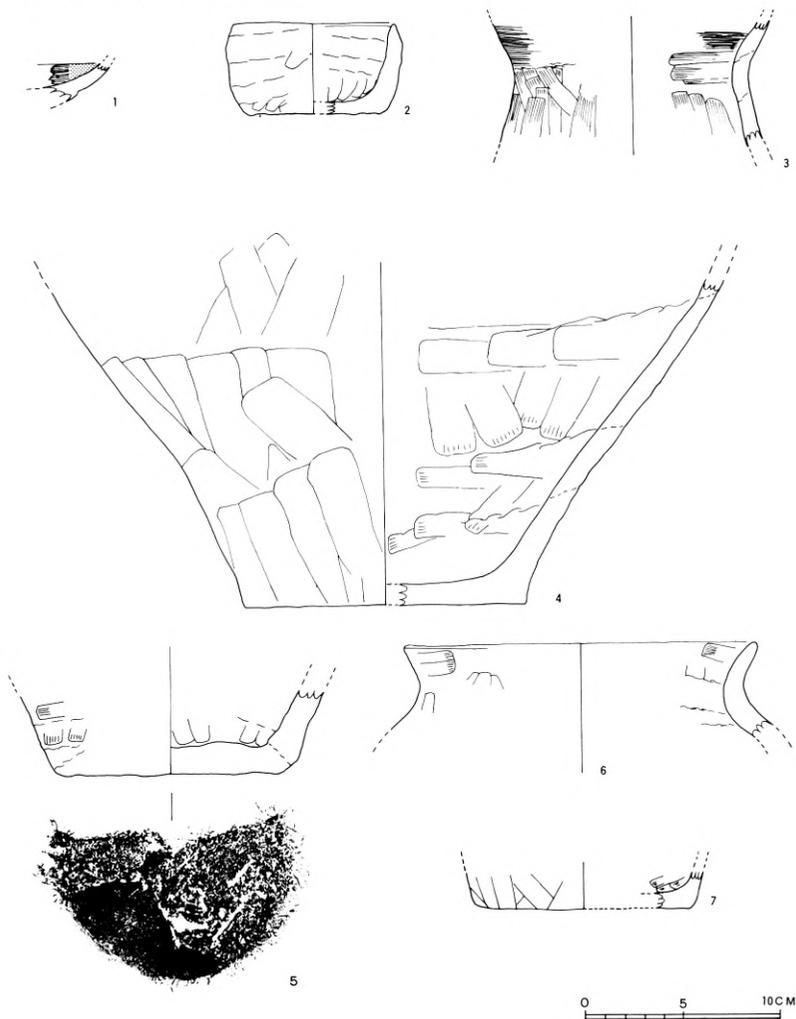
(3) は住居跡内より出土した頸部の破片を図上復元した。器形は小型の甕と思われる。外面体部はハケメ調整、内面体部はヘラナデが施され、頸部は内外面共横ナデが施されている。断面の一部にまき上げ痕が観察される。推定胴径15cmを測る。

(4) は体部の上半、口縁部が欠損した甕を復元実測した。接合不可能の小片が11点あるが器形は鉢形に近い甕と考えられ、底部より体部下半に直線的に大きな広がりを持ち、胴部中央よりやや膨み、体部に至る。外面は幅のあるハケメケズリ、内面はヘラナデが施され、まき上げ痕が観察される。胎土は荒く粗雑で焼成は悪い。底径14.5cm、胴径33cm。

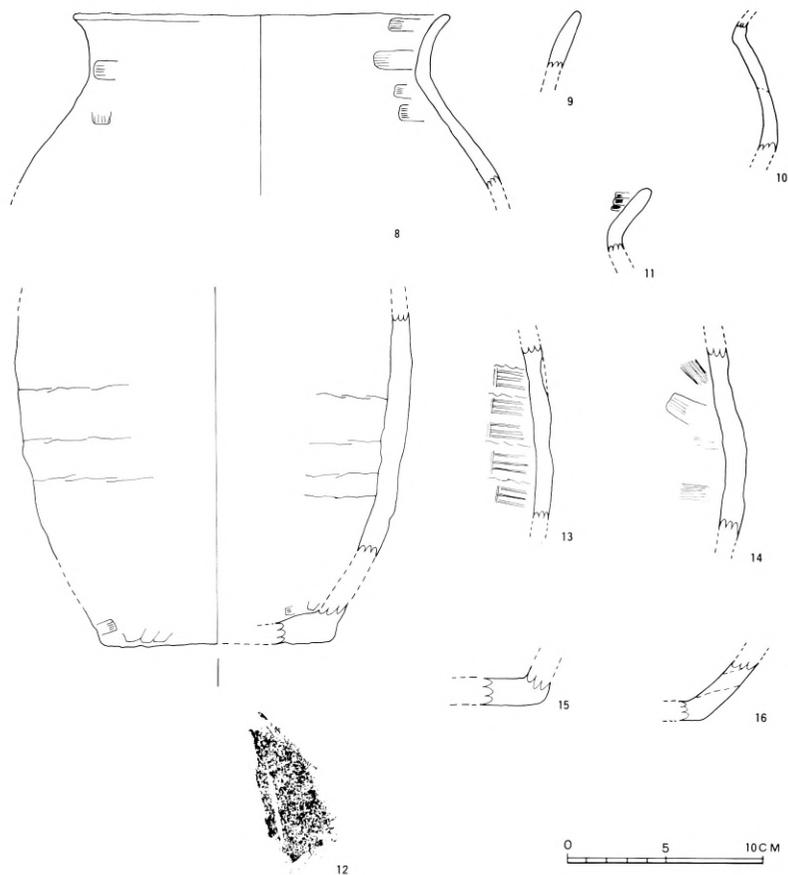
(5) は底部約 $\frac{3}{4}$ 残存を復元実測した。傷等による凸凹はあるもののほぼ平な底部より丸味

第3章 第1節 竪穴住居跡

第11圖 第3号住居跡出土遺物実測図



第12図 第3号住居跡出土遺物実測図



をおびて立ち上がり、直線的に外傾すると思われる。内外面共ヘラケズリ痕、粘土貼り付け痕が見られる。内面の体部下端にヘラケズリ痕が一めぐりの呈を示し残る。器肉は厚く、胎土が荒く、焼成も甘い。推定底径は11.8cmを測る。

(6) は口縁部の破片を図上復元実測した。体部は丸味を滞び、頸部で急に「く」の字にく

第3章 第1節 竪穴住居跡

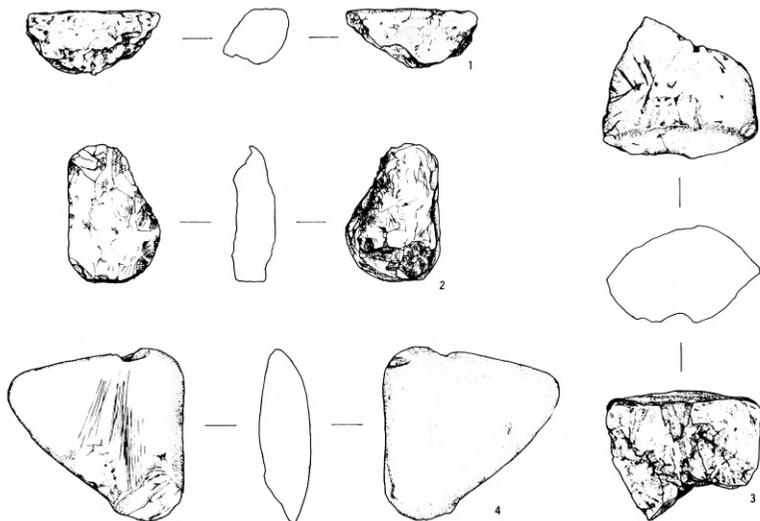
びれ外傾して口縁部に至る、肩の張った形を呈すると思われる。摩滅が激しいが巻き上げ痕とヘラケズリ・ヘラナデが観察される。器肉はやや厚い。推定口径18cmを測る。

(7)は底部の破片約々残存を復元実測した。外面縦方向のヘラケズリ、内面はヘラ調整が施されている。推定底径11cmを測る。

(8)は口縁部から体部へかけて約々残存の破片を図上復元実測した。体部は丸味をおびて頸部に向かって内湾し、「く」の字に急に外傾し口縁部へ至る。器肉は薄い、大型の甕と思われる。内外面共摩滅が激しく技法は明瞭でないが、わずかにヘラ調整が見える。内面頸部の稜線は明瞭に観察される。推定口径19.4cmを測る。

(9、10、11、13、14、15、16) 9と11は口縁部、10は頸部から体部、13・14は体部、15・16は底部のいずれも破片である。10と16は断面に巻き上げ痕、13は内面にクシ目、9・10・11・14・15にヘラ調整が観察される。

(12)は底部約々残存の破片と、体部約々残存の破片を図上復元実測した。底部よりやや直線的に立ち上がりをもって外傾し、体部はややふくらみをもち内湾気味に口縁部へ至る形を呈



第13図 第3号住居跡出土遺物実測図

0 5 10CM

### 第3章 第1節 竪穴住居跡

するものと思われる。内外面共摩滅が激しく、輪積み粘土を押し伸ばしたと思われる痕が残るのみで調整は不明である。底部には木葉痕が観察される。推定最大胴径20.4cm、推定底径12.2cmを測る。

#### 土製器（第13図・1・3、第13図版）

（1）は長さ6.8cm、巾3.1cmを測る。大型の甕の丸味をおびた底部の角の形を呈する破片であるが、長さが直線的にのびる様子を呈する為、何であるか、用途は不明である。明黄橙褐色を呈し、胎土の粒子は荒い。

（3）は高さ6.3cm、底径8.2cmを測る円筒状の土製品の破片である。底部中央に径1.2cmを測る穴状を呈する凹部を有する。暗灰黄橙褐色を呈する緻密な胎土の底部と体部に黒色変化が見られる。形から見た所、土器を焼く時の土台に使用されたものであろうが、全体の形が把握できないので、断定はできない。

#### 石（第13図・2・4、第14図版）

（2）は長さ7.2cm、巾4.8cm～2.2cm、厚さ2cmを測る、ひょうたんを縦半分に割った様な形を呈す。石質は石英で、瑪瑙色を呈す。火打石として利用したかと考えられる。

（4）は各辺の長さが10.5cm、8.5cm、8.4cmで、厚さ2.8cmを測る三角形で二枚貝の様な形を呈す。一面に平行直線が多数観察される。浅い傷状で、研磨による痕かとも思われるが、用途は不明である。色調は青味がかった黒色を呈し、石質は硬緻である。

### 第4号住居跡（S I -04）（第14図、第4・5図版）

〔検出状況〕 M-5・6・7～N-5・6グリットにかけて第3号住居を切って検出された。今回の調査区の中では東端に位置する。

土砂崩れ等の流れ込んだ堆積土（黒褐色土）によって、住居跡として境目がはっきりせず、プラン線引きが非常に難しく、検出作業は困難であった。

〔プラン・規模・方向〕 住居跡の北西角部が第3住居跡を切って、南北に長く、南下がりに構築されている。

北壁の長さが5m10cm、東壁が5m80cm、南壁が5m30cm、西壁が6m10cmを測る隅丸長方形のプランを呈する。

規模は床面積が約33.1㎡であり、本調査区内より検出された住居跡の中では最大規模を測る。

中心線は南北軸方向、N-19°-Wを示す。

〔壁・床面〕 壁高は、北壁9cm、東壁19cm、南壁20cm、西壁17cmを測る。北壁はゆるやかな立ち上がりを呈し、東壁、西壁、南壁はやや直角に近い立ち上がりを呈する。



### 第3章 第1節竪穴住居跡

床面は明黄褐色の粘土層を直接踏み固めてやや南下がりに構築されている。

住居跡内の南中央部床面付近より、土師器片が9点出土しているが、その内5点が内黒土師器片である。

〔覆土〕 大別して4層に別けられる。1層は黄黒褐色土で、砂粒が多量に混入していてサラサラしている。又、小礫や焼土粒も混じる。2層は明黒褐色土で、焼土粒、小礫が多量に混入し、炭化物も混じる。3層は黄褐色土で、小礫が多量に混入し、粘土粒も混じる。4層は黒黄褐色土で、焼土粒が混入し、粘土粒が混じり、しっとりしている。

〔カマド〕 全体のプランは不明であるが、煙道部が北壁中央から2.1mの長さで、住居外に張り出して構築されている。

破壊が著しく、両袖部、焚口部、燃烧部などは確認できなかった。

煙出しピットは、底部が約30cm程掘り込まれ、煙道部に対して、いわゆる頭でっかちの型を呈する。

〔ピット〕 住居跡内外に36個のピットを検出した。

P<sub>1</sub>は上面径38cm×38cm、深さ20cm、P<sub>2</sub>は上面径40cm×35cm、深さ18cm、P<sub>3</sub>は上面径49cm×27cm、深さ38cmを測る。その断面形状、位置的にみて、主柱穴と考えられるが、深さの掘り込みがたりず、浅いようだ。P<sub>1</sub>より内黒土師器片が1点、P<sub>2</sub>より土師器片が10数点出土している。

P<sub>11</sub>は上面径63cm×72cm、深さ23cmを測り、不整形を呈し、土師器片が2点出土している。

P<sub>13</sub>は上面径27cm×30cm、深さ13cmを測り、円形を呈し、土師器底部片が1点出土している。

P<sub>19</sub>は上面径51cm×70cm、深さ20cmで隅丸長方形を呈す。

P<sub>21</sub>は上面径60cm×58cm、深さ42cmで土師器片2点出土。P<sub>22</sub>は上面径66cm×58cm、深さ26cmで、土師器片3点出土している。

P<sub>23</sub>は上面径30cm×35cm、深さ53cm、P<sub>24</sub>は上面径27cm×24cm、深さ49cm、P<sub>25</sub>は上面径20cm×32cm、深さ43cm、P<sub>26</sub>は上面径19cm×22cm、深さ33cmを測り、その規模、断面形状が似通っており、間尺もP<sub>23</sub>とP<sub>24</sub>の間は1.6m、P<sub>23</sub>とP<sub>26</sub>の間は1.2m、P<sub>24</sub>とP<sub>26</sub>の間は1.7mを測り、一直線上に並ぶ為、柵列かとも考えられたが、南壁より外に10cm位しか離れていない為、軒の支柱か出入口の遺構に伴うものでもあろうか。

〔遺物〕 第4号住居跡内外より、115点遺物出土。その内、住居跡南壁中央付近の床面より、内黒土師器片が4点出土した。その内3片は、同一の(第15図・4)杯片であった。

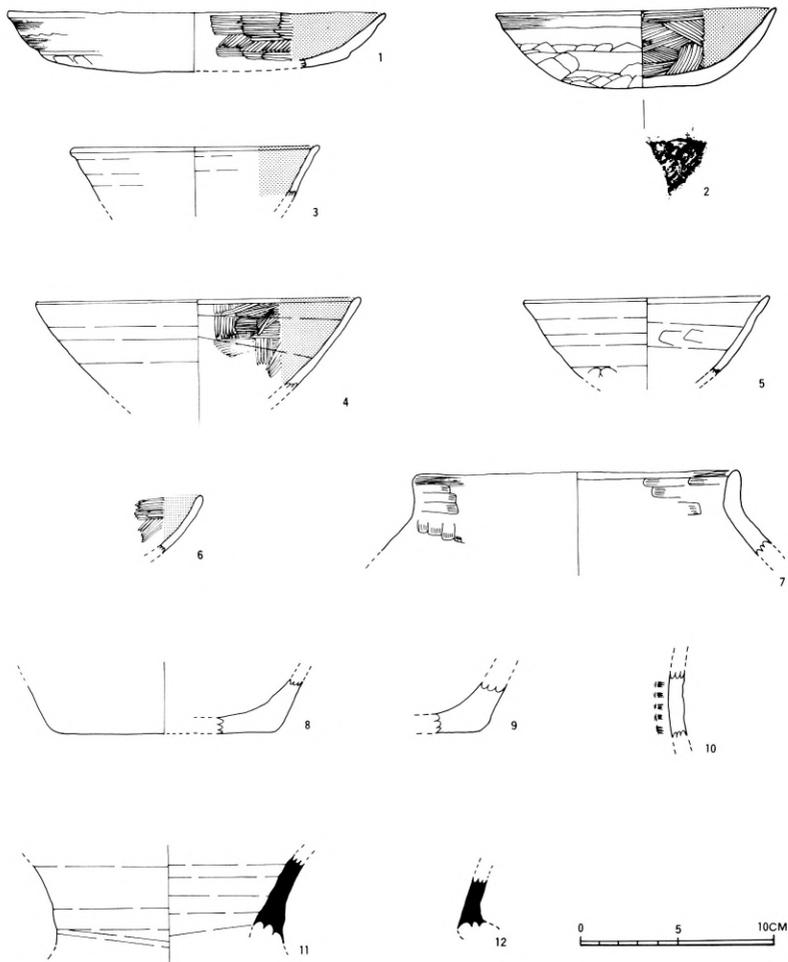
P<sub>1</sub>内より出土の内黒土師器片は(第15図2、第14図版)復元可能な杯であった。

P<sub>11</sub>ピット付近より段を有する内黒土師器の(第15図1、第14図版)杯片が出土した。

遺構確認面より須恵器甕の頸部片(第15図11、第14図版)と、須恵器壺の頸部片(第15図

第3章 第1節 竪穴住居跡

12第14図版) が出土した。



第15図 第4号住居跡出土遺物実測図

### 第3章 第1節竪穴住居跡

#### 土師器 (第15図・1～10、第14図版)

##### 杯 (第15図・1～6)

(1) は体部から口縁部にかけて約 $\frac{1}{2}$ の破片を図上復元実測した。器形は丸底で、体部に段を有し外傾しながら口縁部に至る。外面口縁部は横ナデが施され、底部には手持ちヘラケズリがわずかに見られる。内面は黒色処理が施され、横方向の丁寧なヘラミガキが観察される。推定口径19.5cmを測る。

(2) は約 $\frac{1}{2}$ 残存の杯を復元実測した。底部は平底風の丸底である。底部より体部にかけて丸みを持って立ち上がり口縁部に至る。外面口縁部には横ナデ、体部より底部にかけて手持ちヘラケズリ・ヘラ調整が施されており、口縁部下端には軽い稜線がみられる。内面は黒色処理の後、全体に他方向の丁寧なヘラミガキが施されている。器厚は肉厚である。推定口径14.4cm、高さ4cmを測る。

(3) は口縁部の破片を図上復元した。体部はほぼ直線的に広がりを持って口縁部へ至る。内外面共ロクロ線が明瞭に観察され、内面は黒色処理が施されているが、ミガキは見られない。器肉が薄く、焼成は堅緻である。推定口径12.4cmを測る。

(4) は住居跡内床面から出土したものである。口縁部から体部にかけて約 $\frac{1}{2}$ 残存する内黒の杯の破片を図上復元した。体部より口縁部にかけて直線的に広がる形を呈する。内外面共ロクロ調整痕がわずかに残り、内面は黒色処理が施され、不定方向のヘラミガキと若干のナデが観察される。推定口径16.4cmを測る。器肉は薄い。

(5) は住居内床面より出土したもので、口縁部から体部にかけて約 $\frac{1}{2}$ 残存のロクロ使用の杯の破片を図上復元実測した。外面体部はロクロ成形後手持ちヘラ調整痕が観察される。内面は摩滅がげしいが、黒色処理が施され手持ちヘラ調整痕が残るが、ミガキは見られない。器肉は薄く焼成は良好である。推定口径12.6cmを測る。

(6) は住居跡内より出土した杯の破片である。器厚が厚く外面にロクロ成形による線が2本観察される。内面は口縁部は横ナデ、体部は縦方向のミガキがみられ内黒処理が施されている。

##### 壺型土器 (第15図・7)

(7) は頸部と口縁部の約 $\frac{1}{2}$ の破片を図上復元した。頸部の短い壺型土器と思われる。頸部からほぼ直立気味に口縁部に至る。内外面共、丁寧な横ナデとヘラ調整が施されているが、内面はやや腐触状を呈す。推定口径16.4cmを測る。

##### 甕 (第15図・8～9)

(8・9) は住居跡内より出土した底部の破片である。8は約 $\frac{1}{2}$ 残存を図上復元した。いずれも体部下端と底部にヘラケズリ調整が施されているが、摩滅が著しく観察が困難である。8

### 第3章 第1節 竪穴住居跡

の推定底径12cmを測る。

(10) は甕の体部の破片である。外面は縦方向のクシ目と巻き上げ痕が残る。内面は横方向のクシ目の跡が明瞭に残る。

#### 須恵器 (第15図・11、第14図版)

##### 壺 (第15図・11)

(11) は壺の頸部の破片であり、約半残存を図上復元実測した。内外面共ロクロ成形による水挽き痕が観察される。内面に指頭圧痕、断面に体部とのハリツケによる接合の痕がみられる。外面一部に熱による変化と思われる痕が見られる。推定頸径12cmを測る。

#### 灰釉陶器 (第15図・12)

##### 壺 (第15図・12)

(12) は長頸の壺の破片と思われる。頸部と肩部との境界に一条の稜線を有する。内外面共にロクロ成形による水挽き痕がみられる。外面には緑色の灰釉がかけられ、一部には熱による変化が観察される。

#### 第5号住居跡 (S1-05) (第9図、第3・第5図版)

[検出状況] 第3号住居跡と切り合って、北壁部が重複する形で検出された。

第3号住居跡が、ほぼ全遺構を検出した後、どうしても北壁が明瞭さを欠く為、掘り込みをした所、もう1つ壁が重複し、それに伴い煙道と思われる、細く北にのびる遺構を確認した。東壁は、第3号住居跡と第4号住居跡とに切られ、他はまったく第3号住居跡と重複関係にあり検出できなかった。

[プラン・規模・方向] 北壁、約3m、東壁、約1m50cmを測るのみである為、プラン・規模は不明である。

方向は、北東角に壁が残存することから考えて、心中線は南北を示すであろうと思われる。

[カマド] 第3号住居跡の北東角壁に切られる呈をなし、第5号住居跡北壁の中央に位置する。煙道巾、上径23cm、底径10cm、煙出しピット先までの長さ、1m15cmを測る。カマドから遺物は何も出土していない。覆土、ピット、遺物等は、第3号住居跡と重複関係にある。

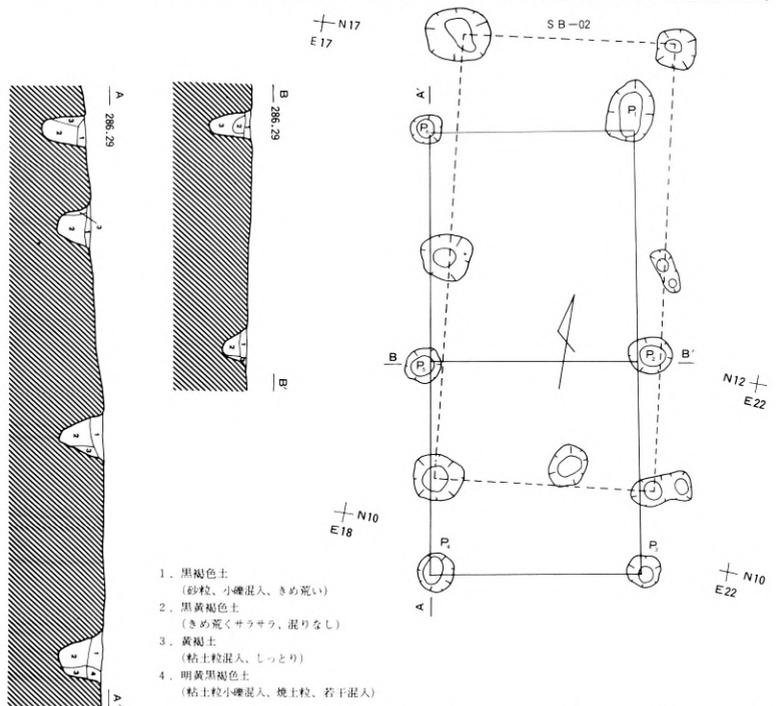
### 第3章 第2節掘立柱建物跡

#### 第2節 掘立柱建物跡

調査区内中央より西部側にわたって、柱痕を伴う掘り方を含むピット群が確認された。検出面は第4層の耕作土直下ローム面において検出されたものである。竪穴住居跡との関連は推測できないが、これらのいくつかは何らかの関わりをもったピットであろうと思われ、柱穴と断定するには無理があるが、一応、全体の規模が推測されるものだけを、建物跡として報告することとした。

#### 第1号、第2号建物跡(SB-01、SB-02)(第16・17図、第1・2表、第5・8図版)

D~2・3グリットにかけて検出された柱穴群である。第1号建物跡、第2号建物跡ともほ



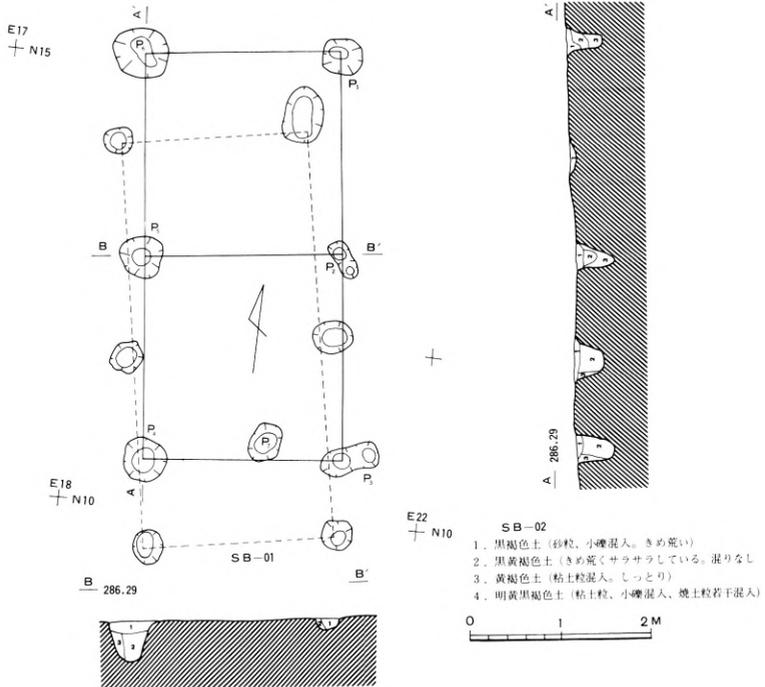
第16図 第1号建物跡

第3章 第2節掘立柱建物跡

ほぼ同じ規模で、間数は南北2間、東西1間であり、主軸方向は1号建物跡がN-9°-W、2号建物跡がN-5°-Wを示す。掘り方埋土は、いづれも3層に分けられる。2棟の建物跡の前後関係、用途は不明である。柱穴内からは1点の遺物も出土していない。

第1表 第1号建物跡ピット形態表

計測値単位 (cm)				柱間距離 (m)
No.	形状	上面径	底面径	深さ
P <sub>1</sub>	楕円形	45×62	23×47	21.0
P <sub>2</sub>	〃	44×37	27×21	18.0
P <sub>3</sub>	隅丸方形	32×32	15×16	60.0
P <sub>4</sub>	円形	35×38	18×28	43.0
P <sub>5</sub>	不整形円形	37×35	25×22	42.0
P <sub>6</sub>	隅丸方形	32×30	17×19	42.0



第17図 第2号建物跡

### 第3章 第2節掘立柱建物跡

**第2表 第2号建物跡ピット形態表**

計測値単位 (cm)					柱間距離 (m)
N <sub>0</sub>	形 状	上面径	底面径	深さ	
P <sub>1</sub>	隅丸方形	63×55	25×28	44.0	2.2m (P <sub>1</sub> ~P <sub>6</sub> )
P <sub>2</sub>	〃	42×40	21×12	15.0	2.31m
P <sub>3</sub>	不 整 形	20×46	12×13	15.0	2.35m
P <sub>4</sub>	〃	52×29	18×18	14.0	2.2m
P <sub>5</sub>	円 形	50×50	25×26	35.0	2.3m
P <sub>6</sub>	不整円形	50×48	22×22	43.0	2.3m
P <sub>7</sub>	隅丸方形	35×48	19×24	41.0	

**第3号、第4号建物跡(SB-03、SB-04)(第18・19図、第3表、第6・8図版)**

D、E～2・3グリットにかけて地山ローム層より検出されたピット群である。その北側よりに13ヶ所の大きささまざま、深さ60cmから13cmのピットが検出された。明らかに柱穴状ピットと思われるが、遺構につながるものが記録できなかった。

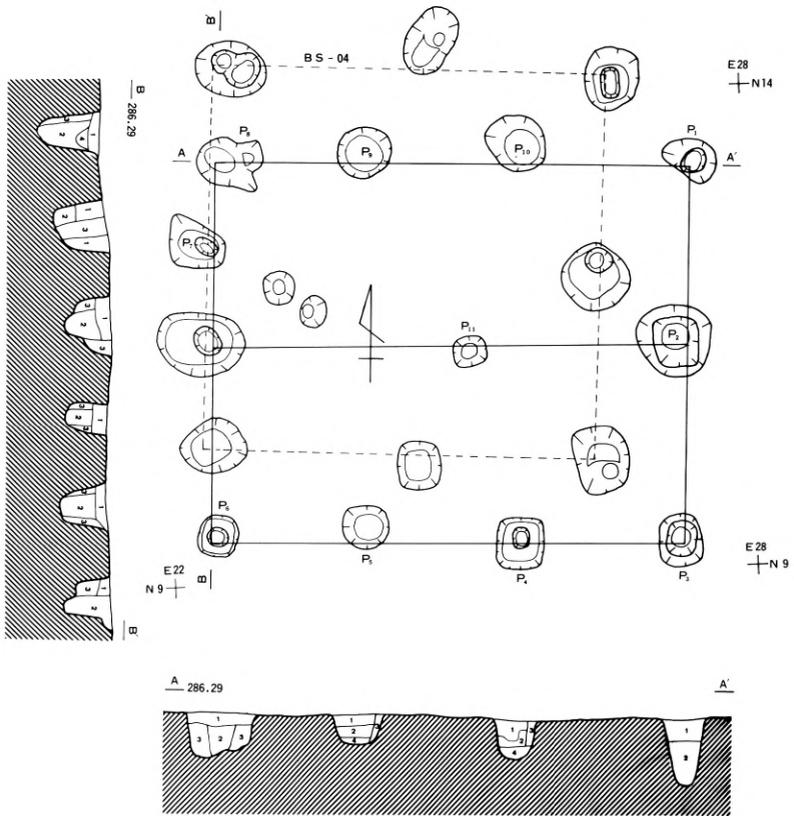
第3号建物跡は11ヶ所のピットが柱穴群と想定でき、規模は間数が東西3間、南北が2間で間尺が1.5m(5尺)から21m(7尺)である。柱穴の深さは平均して40cm～50cmと深い。掘り方埋土も遺存状態が良い。主軸方向はN3°Eである。

第4号建物跡は8ヶ所のピットが遺構に伴う柱穴と思われ、規模は間数が東西2間、南北が2間で間尺が2.1m(7尺)と、ほぼ等間隔で検出され、掘り方、柱痕も遺存状態が良く、確認された。主軸方向はN5°EとほぼSB-03に等しいが、2棟との前後関係や関連性は不明である。又、遺物はSB-04のみ土師器片が2点出土したにすぎない。

**第3表 第3号建物跡ピット形態表**

計測値単位 (cm)					柱間距離 (m)
N <sub>0</sub>	形 状	上面径	底面径	深さ	
P <sub>1</sub>	不 整 形	52×40	15×25	67.0	1.6m (P <sub>1</sub> ~P <sub>10</sub> )
P <sub>2</sub>	不整円形	75×74	26×26	44.0	1.8m
P <sub>3</sub>	隅丸方形	53×43	20×18	22.0	2.1m
P <sub>4</sub>	〃	46×55	11×16	35.0	1.6m
P <sub>5</sub>	円 形	45×45	37×36	62.0	1.6m
P <sub>6</sub>	隅丸方形	38×45	12×12	60.0	1.6m
P <sub>7</sub>	楕円形	87×64	20×20	55.0	2.1m
P <sub>8</sub>	不 整 形	65×50	27×24	46.0	2.1m
P <sub>9</sub>	円 形	52×53	35×35	31.0	1.6m
P <sub>10</sub>	不整円形	63×56	32×37	40.0	1.6m
P <sub>11</sub>	円 形	34×32	16×15	12.0	

第3章 第2節掘立柱建物跡

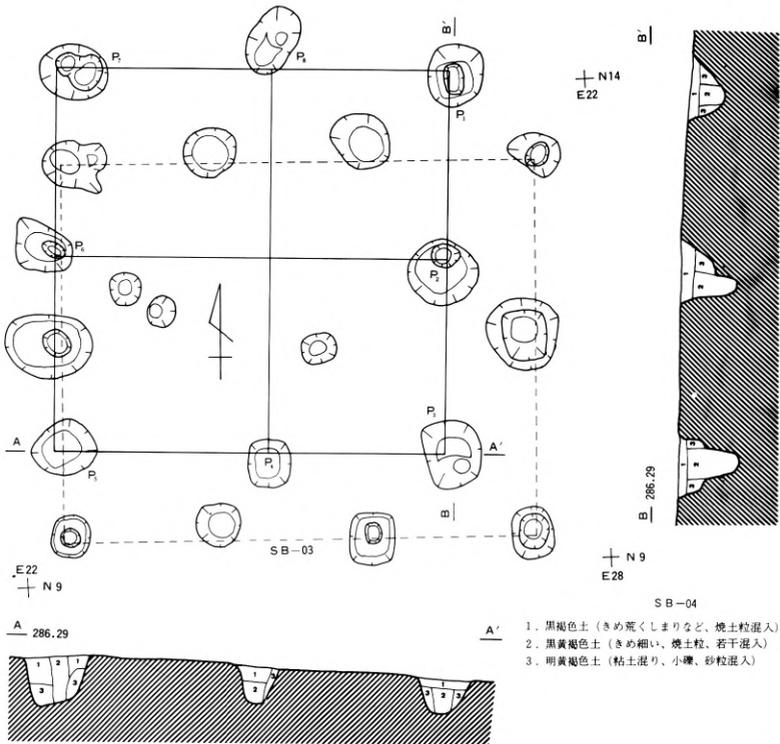


1. 黒褐色土（きのやくサラサラしている。粘土粒、砂粒混入）
2. 黒黄褐色土（きの細くしっとりしている。焼土粒混入）
3. 明黄褐色土（粘土混入、きの細い）
4. 明黒褐色土（まじりなし、きの細い）

第18図 第3号建物跡



第3章 第2節掘立柱建物跡



第19図 第4号建物跡

第4表 第4号建物跡ピット形態表

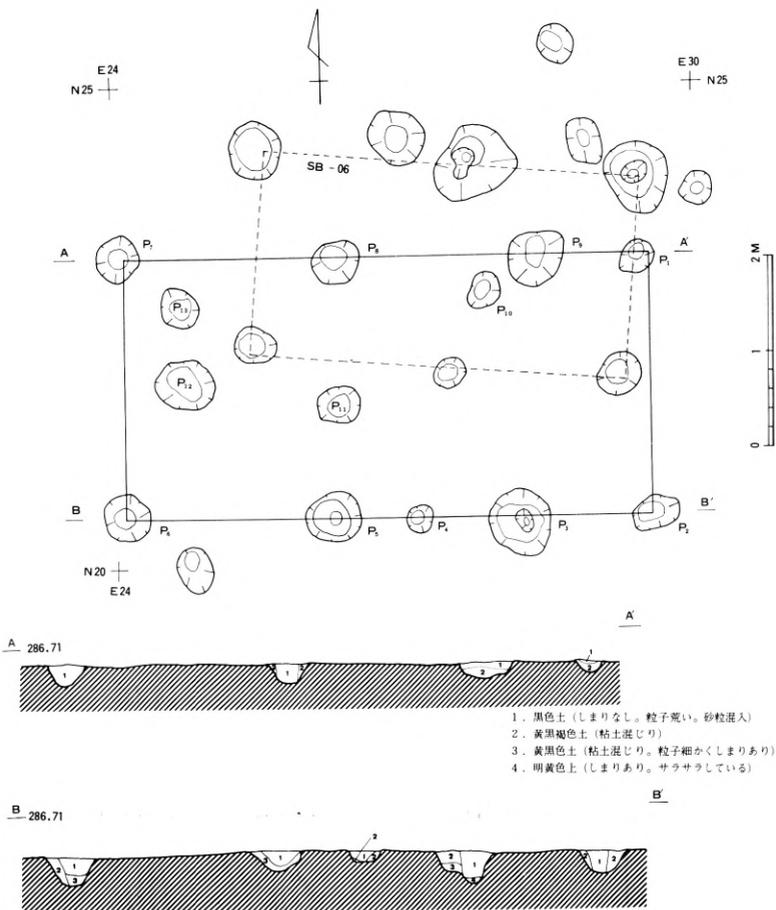
No.	形状	計測値単位 (cm)			柱間距離 (m)
		上面径	底面径	深さ	
P <sub>1</sub>	楕円形	65×56	25×10	64.0	1.8m
P <sub>2</sub>	円形	68×72	17×16	60.0	1.8m
P <sub>3</sub>	不整楕円形	70×57	15×15	37.0	2.1m
P <sub>4</sub>	隅丸方形	48×46	30×26	35.0	1.8m
P <sub>5</sub>	〃	54×52	40×32	47.0	2.1m
P <sub>6</sub>	不整形	47×57	13×12	40.0	2.1m
P <sub>7</sub>	不整楕円形	55×70	14×15	48.0	1.8m
P <sub>8</sub>	〃	75×47	13×12	48.0	2.1m

第3章 第2節掘立柱建物跡

第5号、6号建物跡(SB-05、SB-06)(第20・21図、第5・6表、第6・8図版)

E~4、5グリット内より21個検出されたピット群である。

第5号建物跡の規模は間数が東西が3間、南北が1間で、間尺は約1.2m(4尺)~2.2m(7

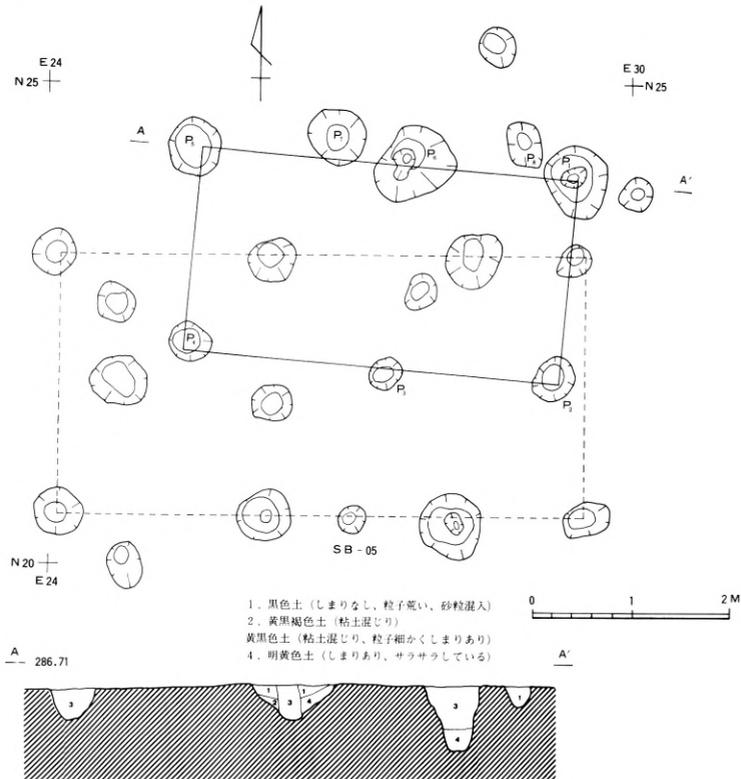


第20図 第5号建物跡

第3章 第2節掘立柱建物跡

尺)であるが、 $P_4$ は間尺が近すぎて柱穴とは考えられない。深さも平均して20cm~33cmと深いが遺物もなく、遺構に結びつくものが認められなかった。主軸方向は、 $N0^\circ E$ を示す。

第6号建物跡の規模は間数が東西2間、南北が1間と小規模であるが $P_2$ 、 $P_3$ 、 $P_6$ は掘り方、柱痕の保存状態が比較的明確に確認することができる。又、 $P_1$ は深さが65cm有り、柱穴の中から土師器の小片が3点出土している。なお2棟の建物の前後関係は不明である。主軸方向は、 $N5^\circ E$ を示す。



第21図 第6号建物跡

第3章 第2節掘立柱建物跡

土師器 (第22図、1)

甕 (第22図、1)

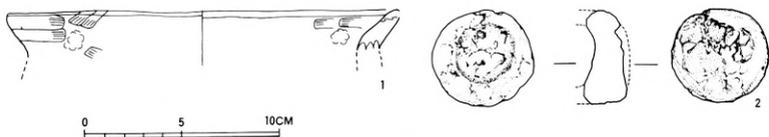
(1) は口縁部約 $\frac{1}{2}$ 残存の破片を図上復元実測した。内外面共ヘラ調整が施され、母指痕が若干残る。外面赤橙黄褐色、内面灰黄褐色を呈す。推定口径20cmを測る。

土製品 (第22図、2、第15図版)

(2) は外径約5cmを測るややいびつな丸い形を呈し、内に直径約3cm程の丸いへこみを有する。色調は明赤褐色を呈し、破損部は黒灰褐色を呈する。胎土は緻密だが粗雑な作りで、母指痕が残る。土器を焼く時の土台に使用されたものであろうが、全体の形が把握できないので、断定はできない。

第5表 第5号建物跡ピット形態表

計測値単位 (cm)					柱間距離 (m)
No.	形状	上面径	底面径	深さ	
P <sub>1</sub>	楕円形	30×38	14×16	10	1.2m (P <sub>1</sub> ~P <sub>9</sub> )
P <sub>2</sub>	不整楕円形	45×34	26×20	13	2.7m
P <sub>3</sub>	〃	61×68	5×9	30	1.5m
P <sub>4</sub>	円形	27×28	14×13	10	1.2m
P <sub>5</sub>	不整円形	56×52	11×13	19	1.0m
P <sub>6</sub>	〃	49×48	23×21	25	2.1m
P <sub>7</sub>	隅丸方形	45×49	20×21	21	2.7m
P <sub>8</sub>	不整形	48×44	27×24	20	2.4m
P <sub>9</sub>	不整楕円形	55×58	20×34	7	2.1m
P <sub>10</sub>	楕円形	30×37	16×20	10	
P <sub>11</sub>	不整円形	42×38	22×24	6	
P <sub>12</sub>	〃	61×50	30×39	33	
P <sub>13</sub>	楕円形	39×40	23×21	18	



第22図 第6号建物跡出土遺物実測図

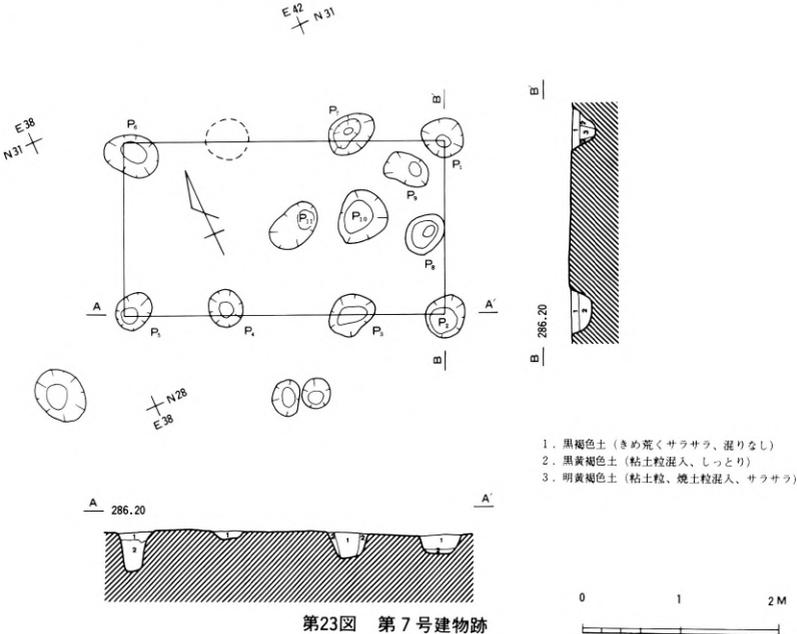
第3章 第2節掘立柱建物跡

第6表 第6号建物跡ピット形態表

計測値単位 (cm)					柱間距離 (m)
N <sub>0</sub>	形状	上面径	底面径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整楕円形	64×75	13×9	66	1.8m (P <sub>1</sub> ~P <sub>6</sub> )
P <sub>2</sub>	隅丸長方形	39×48	23×27	33	2.1m
P <sub>3</sub>	隅丸方形	30×35	17×20	1939	1.8m
P <sub>4</sub>	不整楕円形	43×36	28×24	14	2.1m
P <sub>5</sub>	不整円形	53×61	37×44	21	2.1m
P <sub>6</sub>	不整形	65×85	8×8	28	2.1m
P <sub>7</sub>	不整楕円形	59×53	23×26	31	
P <sub>8</sub>	隅丸長方形	35×48	13×18	17	

第7号建物跡 (SB-07) (第23図、第7表、第7図版)

遺跡の中央・G・5～6グリットにまたがり、S1-01の西側に位置するピット群である。間数が東西3間、南北が1間と小規模である。間尺が90cm(3尺)～180cm(6尺)を測る。柱



### 第3章 第2節掘立柱建物跡

痕がはっきりと確認されたものはP<sub>3</sub>のみであるが、その他のピットもほぼ等間隔であり、柱穴と考えられる。柱穴内からは1点の遺物も出土していないが、遺構確認面より35点の土師器片が出土している。そのうち内外面共黒色処理を施した土師器片が1点出土しているが、建物跡との関連性は不明である。主軸方向はN25°Eを示す。

第7表 第7号建物跡ピット形態表

計測値単位 (cm)				柱間距離 (m)	
No.	形 状	上面径	底面径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整楕円形	45×40	15×13	24	0.9m (P <sub>1</sub> ~P <sub>7</sub> )
P <sub>2</sub>	楕円形	40×46	29×26	21	1.8m
P <sub>3</sub>	不整形	43×45	26×15	13	0.9m
P <sub>4</sub>	隅丸長方形	35×40	14×16	8	1.2m
P <sub>5</sub>	不整楕円形	37×43	18×17	40	0.9m
P <sub>6</sub>	楕円形	58×43	29×19	51	1.8m
P <sub>7</sub>	〃	44×50	5×10	9	2.4m
P <sub>8</sub>	不整楕円形	36×46	9×14	13	
P <sub>9</sub>	隅丸長方形	45×30	12×15	14	
P <sub>10</sub>	不整形	48×56	26×34	22	
P <sub>11</sub>	隅丸長方形	37×57	16×20	12	

### 第8号建物跡 (SB-08) (第24図、第8表、第7・8図版)

遺跡の東部、S I-03に重複し検出された遺構である。中央部に地床炉 (S X-01) が設置されており、炉を囲む状態で12個の柱穴が検出された。いずれも深さ28cm~45cmと統一しており、間隔も等しく、柱穴内からは多量の焼土、炭化物が出土しているため、P<sub>1</sub>~P<sub>11</sub> (P<sub>3</sub>を除く) の12本の柱を使用して建立したと思われる。

プラン・規模は、径4.5mの円形(17m<sup>2</sup>)を呈し、S I-01、S I-03の方形住居跡とほぼ同じ面積をもつが、住居跡やその他の掘立柱建物跡とは、使用目的が異なると考えられる。敢えて考えるならば、集会場の様な役割を果たした遺構と推測される。又P<sub>8</sub>の柱穴内より出師器片が3点、遺構確認面で49点出土している。又、P<sub>3</sub>の柱穴はS I-03に伴うピットである。

#### 土師器 (第25図・2、第15図版)

##### 杯 (第25図・2)

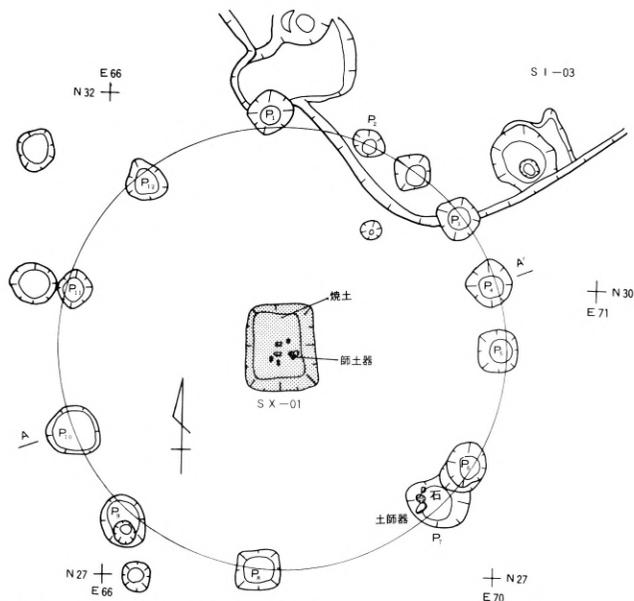
(2) は底部と体部の約1/3残存の破片を図上復元実測した。底部は平底で体部へと直線的に立ち上がるを呈をなし、ロクロ成形による。回転ヘラオコシによる切り離しが底部外面に観察される。内面は黒色処理の後、ヘラミガキが施されている。推定底径5cmを測る。

##### 甕 (第25図、1・3)

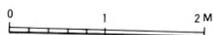
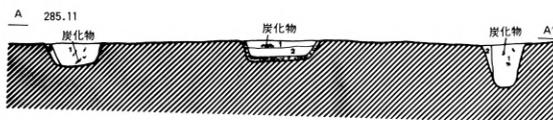
(1) は底部約1/3残存の破片を図上復元実測した。底部に木葉痕が見られるものの、摩擦が著しく調整は不明である。色調は明橙黄褐色を呈す。推定底径9.8cmを測る。

### 第3章 第2節 掘立柱建物跡

(3)は体部から底部へかけての破片を図上復元実測した。底部は器肉が3cmの厚味があり、体部へ直線的に広がりを持つ。大型の甕の底部と考えられる。外面はヘラケズリの後ハケメ調整が施され、内面は摩滅が激しく調整は不明だがかすかにヘラケズリが見える。胎土は荒く、焼成があまり。内外面共明黄茶褐色を呈す。推定底径8cmを測る。

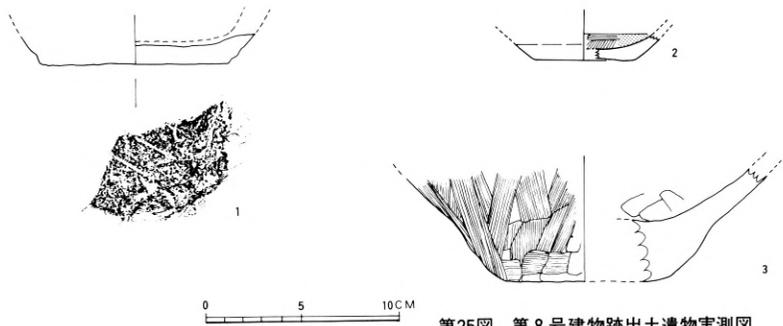


1. 黒黄褐色土 (粒子が細くしっとりしている、焼土粒多量混入、炭化物混入)
2. 明黄褐色土 (粘土質)
3. 黒褐色土 (粒子荒くサラサラしている、焼土粒炭化物多量混入)
4. 赤褐色土 (焼土)



第24図 第8号建物跡

第3章 第2節 掘立柱建物跡



第25図 第8号建物跡出土遺物実測図

第8表 第8号建物跡ピット形態表

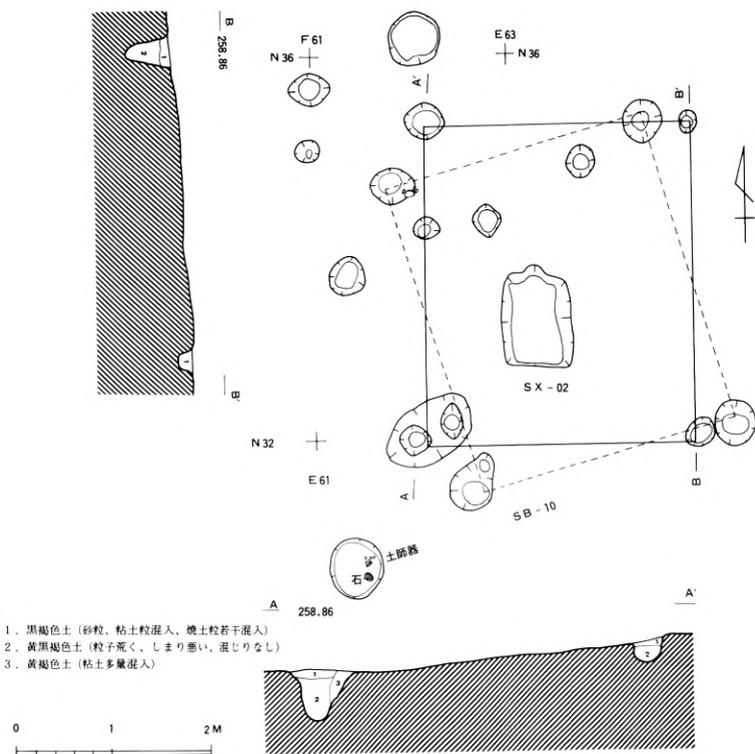
計測値単位 (cm)				柱間距離 (m)	
No.	形状	上面径	底面径	深さ	
P <sub>1</sub>	隅丸方形	40×42	19×19	33	1.5m (P <sub>1</sub> ~P <sub>13</sub> )
P <sub>2</sub>	楕円形	34×29	16×16	31	1.2m
P <sub>3</sub>	隅丸方形	37×37	20×22	34	0.6m
P <sub>4</sub>	〃	39×41	22×22	30	0.6m
P <sub>5</sub>	〃	44×44	26×24	23	0.9m
P <sub>6</sub>	〃	41×43	25×25	22	0.6m
P <sub>7</sub>	不整楕円形	36×96	20×25	45	1.2m
P <sub>8</sub>	〃	36×96	34×34	30	0.6m
P <sub>9</sub>	隅丸長方形	47×41	30×27	30	2.1m
P <sub>10</sub>	不整楕円形	47×55	10×8	35	1.5m
P <sub>11</sub>	不整形	57×50	44×42	22	1.2m
P <sub>12</sub>	隅丸方形	35×35	23×21	25	1.5m
P <sub>13</sub>	不整形	38×45	23×27	32	1.2m
P <sub>14</sub>	不整円形	22×20	4×6	28	

第9号建物跡 (S B-09) (第26図、第9表、第7図版)

K-6グリット内の、S I-03の西側に位置する。S B-10とは重複関係にあり、地床炉 (S X-02) を囲む形で4個のピットが検出された。

全体的な規模は、間数が1間で、間尺が10尺(3.3m)×9尺(2.7m)で、いずれも掘り方は確認できなかった。柱穴の堆積土は黒褐色を呈し、大きさも太いもので45cm、細いもので25cmを測り、不揃いではあるが深さがほぼ一定しており、明らかに柱穴と考えられる。

第3章 第2節掘立柱建物跡



第26図 第9号建物跡

第9表 第9号建物跡ピット形態表

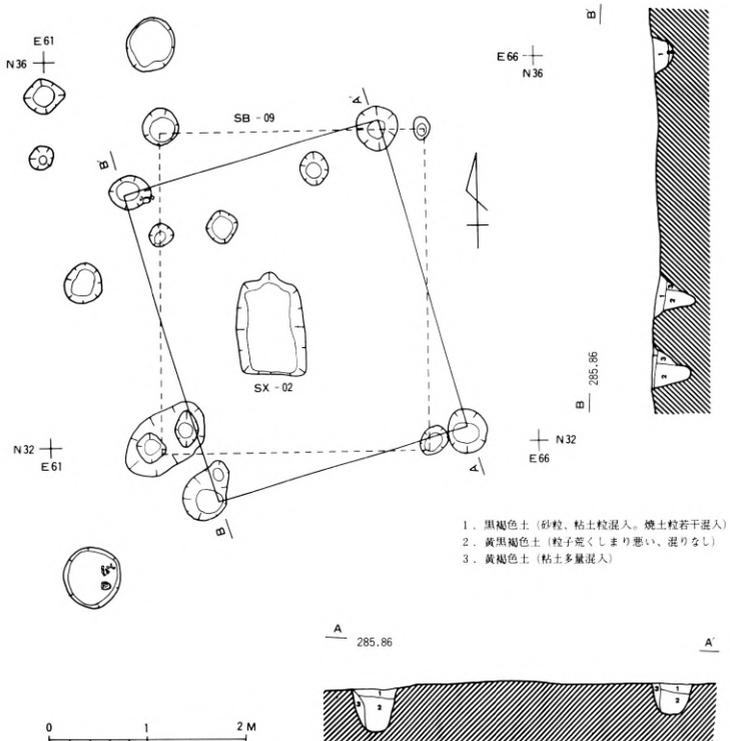
計測値単位 (cm)				柱間距離 (m)
N <sub>0</sub>	形状	上面径	底面径	深さ
P <sub>1</sub>	不整楕円形	17×24	11×18	2.7m (P <sub>1</sub> ~P <sub>6</sub> )
P <sub>2</sub>	不整円形	27×29	15×22	3.3m
P <sub>3</sub>	楕円形	57×96	17×16	2.7m
P <sub>4</sub>	〃	57×96	15×17	0.3m
P <sub>5</sub>	不整円形	26×23	11×13	2.1m (P <sub>3</sub> ~P <sub>5</sub> )
P <sub>6</sub>	隅丸方形	35×35	28×25	1.2m
P <sub>7</sub>	楕円形	28×35	16×16	
P <sub>8</sub>	隅丸方形	28×28	20×20	8

### 第3章 第2節掘立柱建物跡

中央部の地床炉（SX-02）とSB-09とは南北軸方向が $N0^{\circ}E$ と同じ向きであるため、同時期の建物跡に伴う炉と考えられるが、使用目的は不明である。

#### 第10号建物跡（SB-10）（第27図、第10表、第7図版）

SB-10は、SB-09と重複して検出された遺構である。規模・構造共SB-09とまったく同じであり、柱穴の深さ、大きさも統一している。ある時期の建替えた建物とも考えられるが前後関係は不明である。P<sub>4</sub>の柱穴内からは土師器片が4点出土しているが、いずれの時期のもの



第27図 第10号建物跡

### 第3章 第2節掘立柱建物跡・第3節その他の遺構

のか特徴が不明で実測不可能である。又P<sub>3</sub>の南西部に径60cm、深さ30cmを測り、底面が平坦なピットが検出され、覆土内より土師器片が10点出土しているが、いずれも実測不可能である。南北軸方向はN16°Wを示す。

第10表 第10号建物跡ピット形態表

計測値単位 (cm)				柱間距離 (m)	
N <sub>0</sub>	形 状	上面径	底面径		深さ
P <sub>1</sub>	不整形	40×45	17×19	30	2.7m (P <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> )
P <sub>2</sub>	〃	41×45	27×22	35	3.3m
P <sub>3</sub>	不整楕円形	45×63	25×25	38	2.7m
P <sub>4</sub>	楕円形	46×37	24×20	20	3.3m

### 第3節 その他の遺構

#### 第1号遺構 (S X-01) (第28図、第9図版)

〔検出状況〕 L-5グリットより検出され、S I-03の南側に位置する遺構である。検出面は第4層面上において一直線上の焼土が確認されたため、煙道を想定し、調査を行った結果、地床炉と思われる遺構が検出された。

〔プラン・規模・方向〕 東西70cm、南北92cmの長方形を呈し、壁面はほぼ直立状態に掘り込まれている。検出面からの深さは約25cmと浅いが、底面は整然とした平坦な面を形成しており、全体的に掘り込まれた遺構と思われる。堆積土は3層からなり、その大半は、焼土・炭化物で占められ、その層を囲むように赤橙色の焼土が被っていた。

この炉を囲むように半径2m上に12ケの柱穴 (S B-08) が検出されている。

中心線は南北軸方向N0°Eを示す。

〔出土遺物〕 堆積土、1層に土師器片6個が出土した。すべて小片であるが、器形としては、丸底と思われる杯の片が出土しており、S B-08との関連が考えられる遺物と思われる。

#### 土師器 (第29図・1~4、第15図版)

##### 杯 (第29図・1、2)

(1) は底部から体部へかけての破片である。底部は丸底と思われ、底部と体部の境に段はなく、陵線が見える。手持ちヘラケズリが施され、体部にヘラケズリ痕が沈線となり、2本残り、横ナデも観察される。内面は黒色処理の後、丁寧なヘラミガキが施されている。

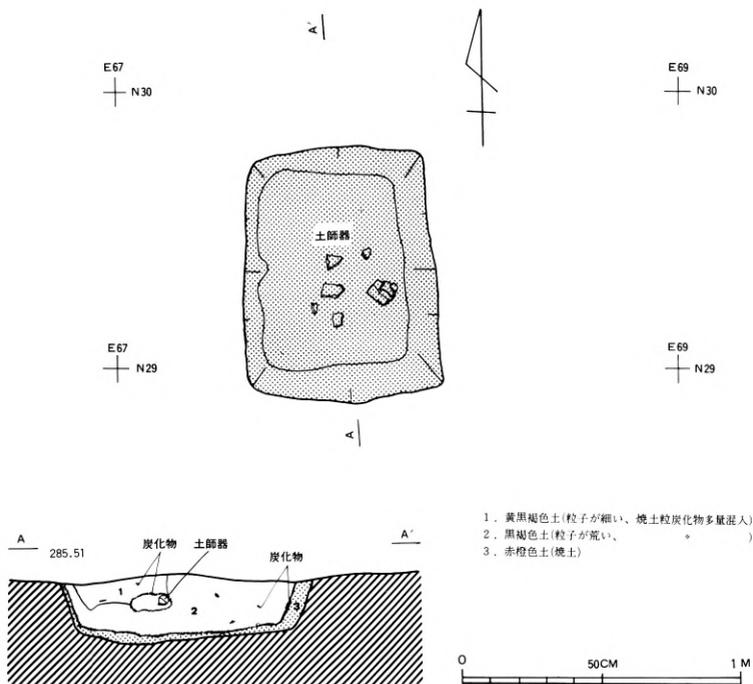
(2) は底部から体部下半にかけての破片を図上復元実測した。体部はやや丸味をもちながら立ち上がる。ロクロ成形により、底部は平で回転糸切りで切り離してある。内面は黒色処理が施されている。色調は白黄褐色を呈している。推定底径6cmを測る。

第3章 第3節その他の遺構

甕 (第29図・3、4)

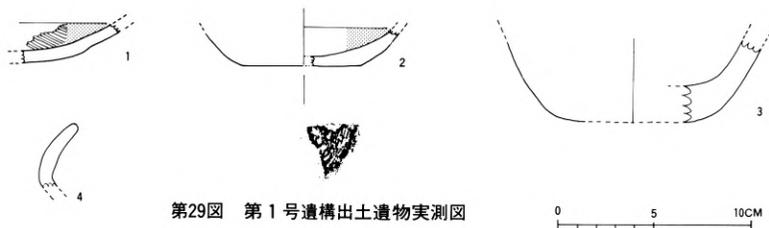
(3) は体部下端の約1/4残存の破片を図上復元実測した。底部から体部へ丸味を持って立ち上がる。調整は内外面共摩滅が著しく観察できない。胎土のキメ荒く、砂粒多量混入され、焼成も悪い。器肉は厚い。推定底径7.5cmを測る。

(4) は口縁部の破片である。外傾した「く」の字を呈する。摩滅が激しく調整は不明。



第28図 第1号遺構

第3章 第3節その他の遺構

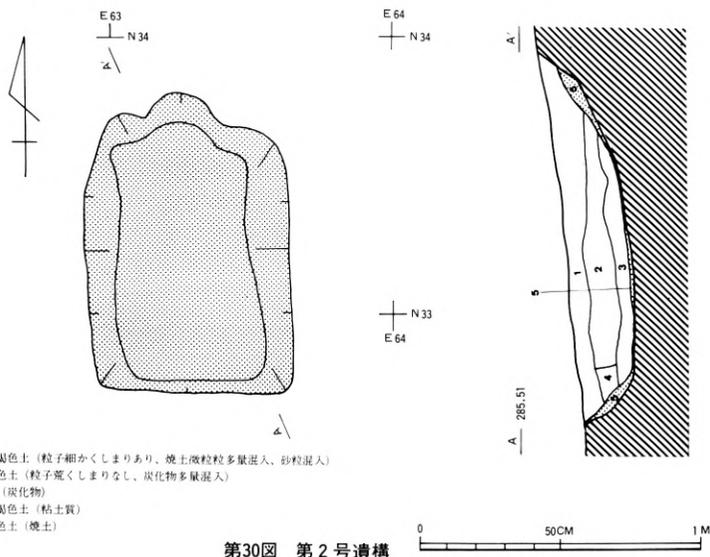


第29図 第1号遺構出土遺物実測図

第2号遺構 (S X-02) (第30図、第9図版)

〔検出状況〕 K-6グリットより検出され、S I-03の西側に位置する遺構である。検出面はS X-01と同じ状況で、第4層面上より確認された地床炉と思われる遺構であり、構造的に類似しているが、同一時期の遺構かは不明である。

〔プラン・規模・方向〕 東西72cm、南北97cmの長方形を呈している。検出面から底面までは



1. 黒黄褐色土 (粒子細かくしまりあり、焼土微粒多量混入、砂粒混入)
2. 黒褐色土 (粒子荒くしまりなし、炭化物多量混入)
3. 黒色 (炭化物)
4. 明黄褐色土 (粘土質)
5. 赤褐色土 (焼土)

第30図 第2号遺構

### 第3章 第3節その他の遺構・第4節溝 跡

22cmあり、壁面は130°の立ち上がり角度をもつ「逆台形」を呈しており、底面は平坦である。

遺構内は5層の堆積土が認められ、最上層は砂質を多く含んだ焼土粒、2層は木炭粒を含む黒褐色シルト層、3層は炭化物、4層は粘土質、5層はS X-01とほぼ同じように遺構内をおおうように赤橙色の焼土が検出された。灰の囲りから13ヶの柱穴が検出されたが、同一時期の遺構(S B-09・S B-10)と考えられる。

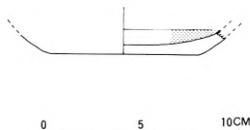
中心線は南北軸方向N0°Eを示す。

〔出土遺物〕 遺構内より平底の内黒土師器片が1点のみ出土している。

**土師器 (第31図・1、第15図版)**

**杯 (第31図・1)**

(1)は底部の約1/4残存の破片を図上復元実測した。平底の底部より体部へと直線的に広がり呈す。ロクロ成形と思われるが、ロクロの線が観察出来ない。外面体部下端に手持ちヘラ調整が施されている。底部に静止ヘラ切り痕がみられる。器肉は薄く焼成はあまり。色調は外面明黄褐色で、内面は黒色処理が施されている。推定底径8cmを測る。



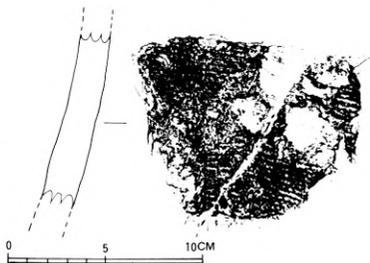
第31図 第2号遺構出土遺物実測図

### 第4節 溝 跡

**第1号溝跡 (S D-01) (第32図、第10図版)**

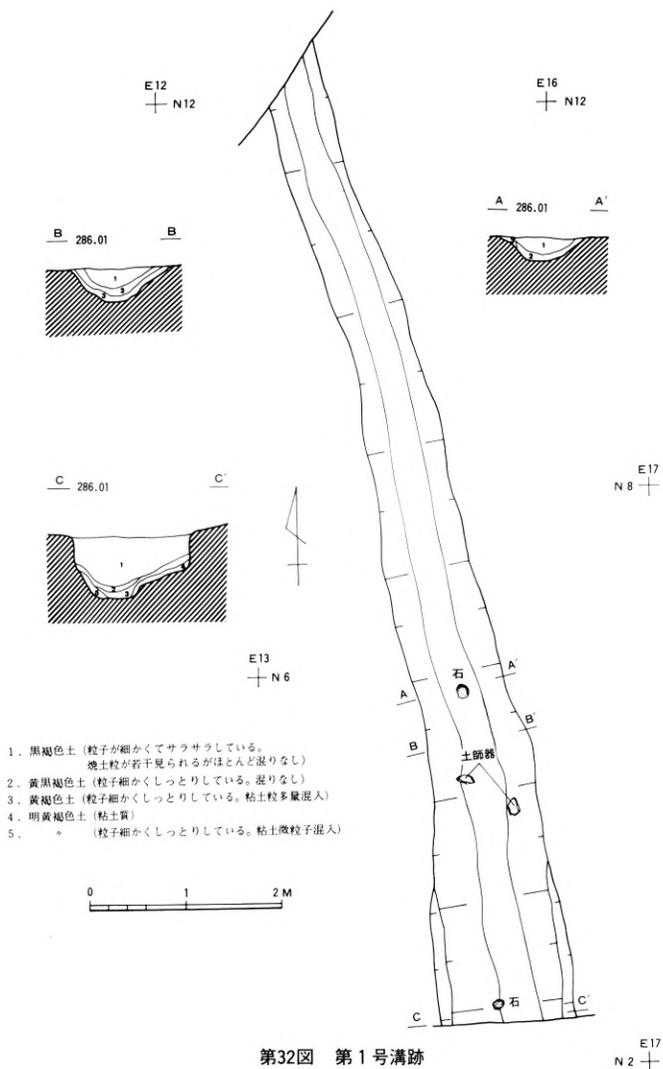
本遺跡の最西端に位置し、C-1、2、3グリット内に検出された遺構である。本遺構は北から南への勾配を呈す。堆積土は5層からなり、検出面は地山ローム質で遺構を確認した。上層面は黒褐色のシルト質であり、5層共自然堆積の状態を呈している。

規模は長さが10m、幅は広い所で1.4m、狭い所で57cmを測る。断面形はU字形を呈し、深さも65cmを測るが、遺物も上層面より土師器片2点(接合可能)出土しているのみで、住居跡・建物跡との関連がつかめなく、使用目的も不明である。



第33図 第1号溝跡出土遺物実測図

第3章 第4節 溝 跡



### 第3章 第4節溝跡・第5節土坑跡

#### 土師器（第33図・1、第15図版）

##### 甕（第33図・1）

(1)は溝内上層部より出土した甕の体部の破片である。外面は摩滅されているが平行叩目が施され、内面はハケメ調整が見られる。高温焼成で仕上げられており、須恵器のように堅い。器厚から推測すると大甕と考えられる。

### 第5節 土 坑 跡

#### 第1号土坑跡（SK-01）（第34図、第10図版）

H・I-6グリット内に東西約7.5m・東北約3.3mを測る楕円形状の粘土質が検出された為、1m×3mのトレンチを設定し、調査したところ、底部に、近代的な土木工作機械によって掘削された痕跡が認められた。又、埋め戻し土の中より、土師器片、須恵器が数点出土しているが、これは現地を知る人からの口証で、遺跡の北部より搬入された土であると判明した為、現代土坑の埋め戻し遺構と考えられる。

〔出土遺物〕

#### 土師器（第35図・1～5、第15図版）

##### 甕（第35図・1、2、3、4、5）

(1)は口縁部から胴部にかけて約 $\frac{1}{2}$ 残存の破片を図上復元実測した。外面口縁部に横ナデ、胴部は縦方向のハケメとナデが施され、内面は一部にヘラケズリが観察される。色調は内外面共明橙褐色を呈する。推定口径18cmを測る。

(2)は底部約 $\frac{1}{2}$ 残存を復元実測した。外面底部に木葉痕が観察されるが、摩滅が激しく、器台部の凸凹が著しい。内外面共ヘラケズリが若干観察される。器肉は厚く、色調は赤橙褐色を呈す。推定口径16.4cmを測る。

(3)は頸部約 $\frac{1}{2}$ の破片を図上復元実測した。「く」の字に外傾する型を呈する。内面は横方向のヘラナデ調整が施され、くびれに陵線が見える。外面はくびれた帯状の沈線が残り、横方向のヘラナデ調整と縦方向のクシ目が観察される。推定頸径18.8cmを測る。

(4・5) 4は口縁部、5は体部の破片である。4は内外面共横ナデ、5はヘラケズリ痕と横ナデが施されている。どちらも器肉は薄く、摩滅されている。

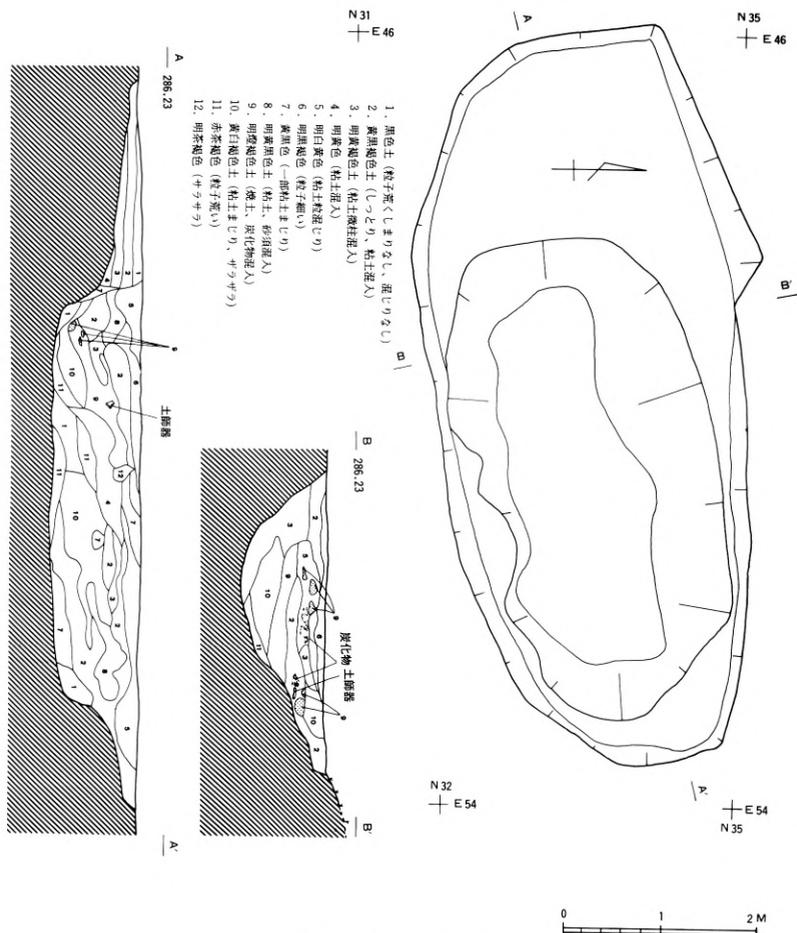
#### 須恵器（第35図・6、第15図版）

##### 甕（第35図・6）

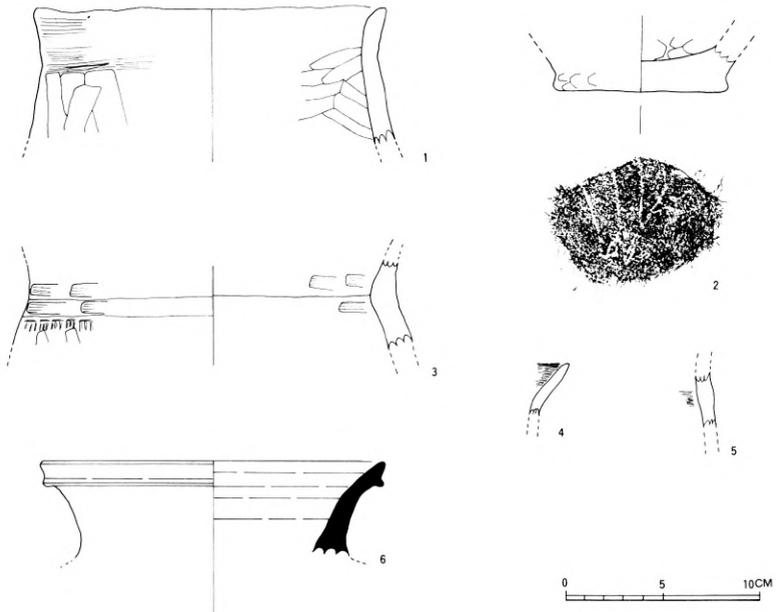
(6)は口縁部から頸部にかけて約 $\frac{1}{2}$ 残存の破片を図上復元実測した。ロクロ使用による水挽きによる横ナデが内外面に観察される。外唇部にヘラ調整による沈線、内唇部に陵線が見

第3章 第5節土坑跡

られる。口縁部は外傾し、折り返し耳の型を呈する。暗青灰色を呈す。推定口径17.3cmを測る。



第34図 第1号土坑跡



第35図 第1号土坑出土遺物実測図

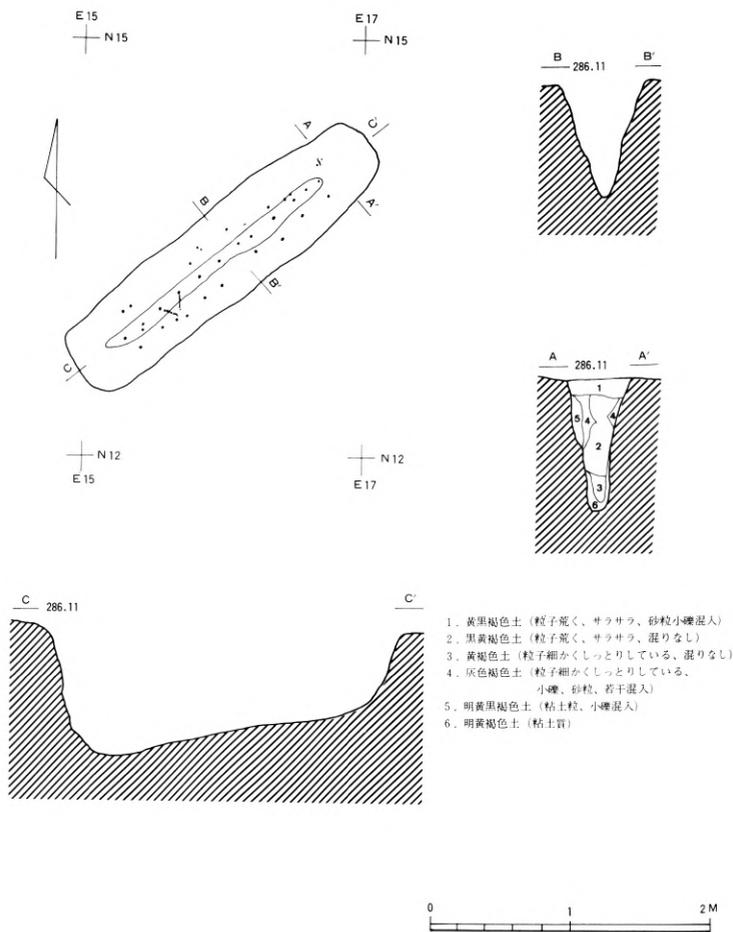
第2号土坑跡 (SK-02) (第36図、第11図版)

遺構の西北部、C-3グリットから検出された大型ピットである。

規模は、主軸線の長さ2.65cm、上部巾65cm、底部巾10cm、深さ95cmを測る。

堆積土は6層からなり、埋土によるものである。検出面は3層面上において、柱穴検出作業中、北東に延びる長方形の密度の荒い黄黒褐色土を確認し、注意深く掘り下げ調査を行った結果、底部に径1cmの丸い竹状の腐食物が一直線上に等間隔で(10cm~15cm)検出され、その腐食物を囲むような状態で、明らかに棒状のものをさしたと思われる痕跡の腐食物を検出した。その形状からみて、落し穴遺構と考えられる。堆積土の中からは遺物は出土していない。

第3章 第5節土坑跡



第36図 第2号土坑跡

## 第6節 遺構に伴わない出土遺物

### 遺構に伴わない出土遺物（第37図・1～3）

#### 土師器（第37図・1～3）

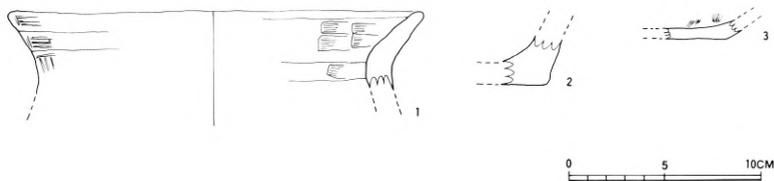
##### 杯（第37図・3）

（3）はJ-5グリットより出土した底部の破片である。底部はほぼ平で、ヘラによる沈線が多角形を呈して多数観察されることから、静止ヘラ起こしと考えられる。底部より直線的に体部へ向けて外傾する形を呈すると思われる。内面はヘラミガキとナデが施されている。色調は内外共赤橙褐色を呈す。器肉は薄く、焼成も良い。

##### 甕（第37図・1、2）

（1）はJ-5グリットより出土した口縁部約 $\frac{1}{4}$ の破片を図上復元実測した。頸部より直線的に外傾し口縁部に至る。外面は頸部くびれ部に横帯状にハケ目と沈線が見られ、縦にハケ目がわずかに見られる。内面はヘラ調整と陵線が観察される。色調は橙黄褐色を呈し、堅緻である。推定口径21cmを測る。

（2）は耕作土より出土した底部の破片である。底部に木葉痕を残す。体部下半はヘラケズリされ、あまり調整はされていない。色調は明黄橙色を呈す。



第37図 遺構に伴わない出土遺物実測図

第3章 第7節 遺構外ピット形態表

第7節 遺構外ピット形態表

第11表 遺構外ピット形態表（東西×南北）

計測値単位 (cm)					計測値単位 (cm)				
No.	形 状	上面径	底面径	深さ	No.	形 状	上面径	底面径	深さ
P <sub>1</sub>	不 整 円 形	45×39	13×12	32	P <sub>33</sub>	不 整 形	45×40	22×15	13
P <sub>2</sub>	円 形	33×35	17×22	24	P <sub>34</sub>	不 整 円 形	45×45	25×27	18
P <sub>3</sub>	〃	27×30	16×19	20	P <sub>35</sub>	不 整 楕 円 形	47×57	17×30	12
P <sub>4</sub>	隅丸長方形	50×35	15×14	27	P <sub>36</sub>	楕 円 形	57×73	11×14	36
P <sub>5</sub>	不 整 形	30×36	22×24	15	P <sub>37</sub>	方 形	35×39	21×25	11
P <sub>6</sub>	円 形	28×30	8×10	20	P <sub>38</sub>	不 整 形	37×45	5×22	8
P <sub>7</sub>	不 整 形	42×49	24×23	47	P <sub>39</sub>	楕 円 形	30×36	13×25	13
P <sub>8</sub>	隅丸長方形	40×54	34×40	21	P <sub>40</sub>	不 整 形	40×45	12×17	25
P <sub>9</sub>	不 整 円 形	42×45	14×7	16	P <sub>41</sub>	不 整 円 形	43×38	17×13	30
P <sub>10</sub>	円 形	47×45	10×13	34	P <sub>42</sub>	楕 円 形	49×60	11×7	36
P <sub>11</sub>	不 整 楕 円 形	42×60	5×10	32	P <sub>43</sub>	不 整 形	28×36	15×20	13
P <sub>12</sub>	楕 円 形	43×53	33×33	11	P <sub>44</sub>	方 形	32×32	15×13	13
P <sub>13</sub>	不 整 円 形	52×48	7×7	13	P <sub>45</sub>	不 整 円 形	43×45	31×27	23
P <sub>14</sub>	楕 円 形	35×65	18×40	9	P <sub>46</sub>	円 形	38×35	10×8	24
P <sub>15</sub>	隅丸長方形	27×35	8×8	21	P <sub>47</sub>	不 整 形	48×45	27×25	9
P <sub>16</sub>	楕 円 形	28×35	3×4	13	P <sub>48</sub>	不 整 円 形	28×25	5×6	36
P <sub>17</sub>	不 整 楕 円 形	30×73	18×47	11	P <sub>49</sub>	楕 円 形	38×63	6×7	11
P <sub>18</sub>	楕 円 形	37×44	20×10	17	P <sub>50</sub>	不 整 楕 円 形	40×27	15×20	16
P <sub>19</sub>	〃	36×48	17×20	16	P <sub>51</sub>	不 整 形	40×50	12×5	12
P <sub>20</sub>	不 整 楕 円 形	45×79	13×17	60	P <sub>52</sub>	〃 形	84×78	23×15	13
P <sub>21</sub>	楕 円 形	45×52	5×4	48	P <sub>53</sub>	不 整 円 形	40×40	5×12	21
P <sub>22</sub>	隅丸長方形	70×85	5×3	11	P <sub>54</sub>	不 整 形	55×58	18×12	45
P <sub>23</sub>	不 整 楕 円 形	52×42	43×30	9	P <sub>55</sub>	隅 丸 長 方 形	25×28	14×14	15
P <sub>24</sub>	〃	33×43	8×15	27	P <sub>56</sub>	不 整 楕 円 形	74×60	68×50	8
P <sub>25</sub>	楕 円 形	37×47	14×18	36	P <sub>57</sub>	隅 丸 長 方 形	45×40	30×28	23
P <sub>26</sub>	不 整 形	47×55	12×8	12	P <sub>58</sub>	不 整 円 形	55×63	50×55	30
P <sub>27</sub>	不 整 円 形	58×57	8×15	9	P <sub>59</sub>	隅 丸 長 方 形	35×40	25×30	25
P <sub>28</sub>	〃	55×52	25×17	17	P <sub>60</sub>	楕 円 形	37×41	20×17	20
P <sub>29</sub>	不 整 形	65×45	37×20	16	P <sub>61</sub>	不 整 円 形	51×55	47×49	15
P <sub>30</sub>	隅 丸 長 方 形	30×33	5×12	21	P <sub>62</sub>	円 形	24×24	6×6	19
P <sub>31</sub>	楕 円 形	42×37	25×18	16	P <sub>63</sub>	隅 丸 長 方 形	52×45	35×29	25
P <sub>32</sub>	不 整 楕 円 形	63×30	26×24	31	P <sub>64</sub>	〃	50×40	30×20	22

## ま と め

名代A遺跡は阿武隈川の西岸にあり、ゴルフ場造成の予定地である。基盤をなす地層は粘土層が覆っている。現在の遺跡の立地状態は、東を玉川村に隣し、東南部は石川町に接し、南は中島村となっている。

名代A遺跡から発見された遺構は、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡10軒、土坑2基（1基は落し穴遺構、1基は現代遺構）、溝跡1条、その他の遺構2基、検出されている。

建物跡はいずれも小型の建物である。

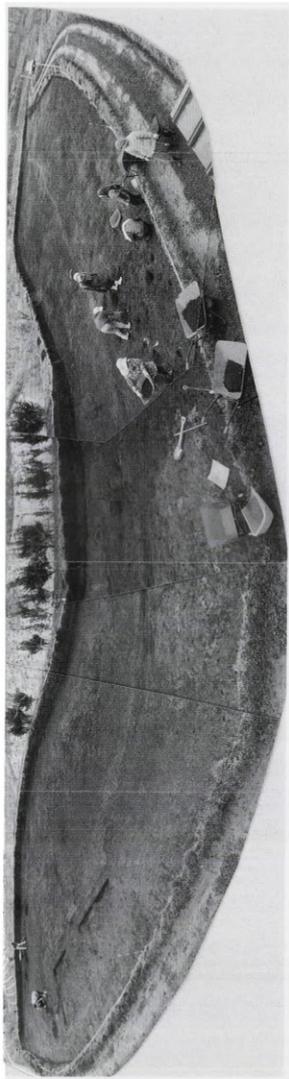
この遺跡の特徴としては、地床炉が2基、地床炉に伴うと考えられる、1間×2間の方形建物が2基、柱穴12個を有する円形建物が1基検出されている。建物の使用目的は不明である。

S I -01～S I -05の各住居跡から出土した土師器は、栗圀式から、表杉の入式までの各時期にわたるところから、奈良時代から平安時代にかけての継続的な変遷をたどっていると考えられる。

最後に、今回の調査にご協力下さいました関係各機関ならびに地元の皆様に深く感謝申し上げます。

# 版 圖

第1図版

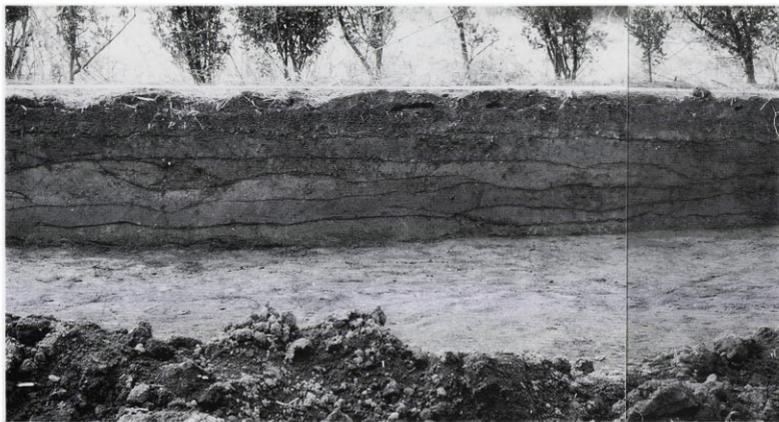


遺跡全景（北より）

第2図版



調査前遺跡全景（東北より）

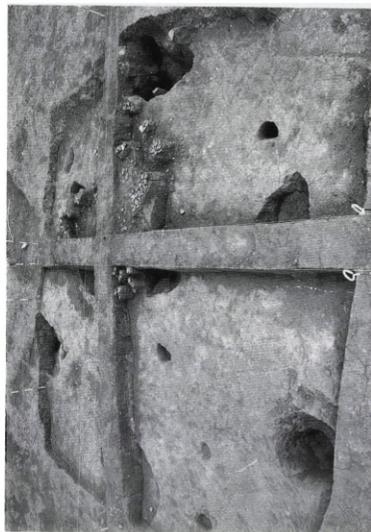


東西ベルトセクション（北より）

第3 図版



第1号、第2号住居跡（東より）



第3号住居跡、調査状況



第3、第5号住居跡（南より）



第3号住居跡、土坑調査状況

第4図版



第4号住居跡(東より)



第1号、第2号住居跡調査状況



第3号住居跡遺物出土状況

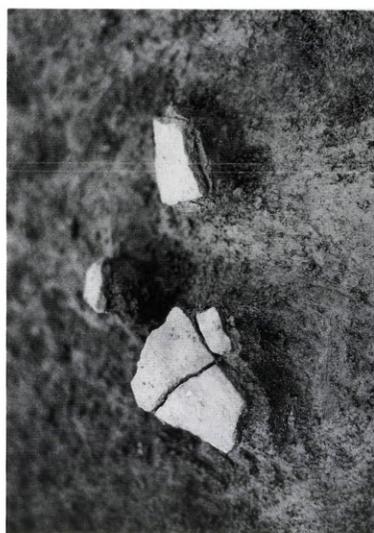


第4号住居跡、調査状況

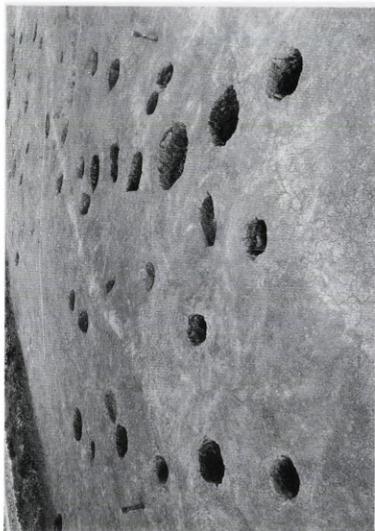
第 5 図版



第 5 号住居跡煙道部 (南より)



第 4 号住居跡遺物出土状況

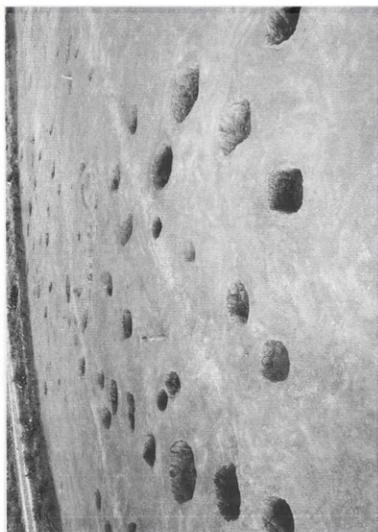


第 1 号、第 2 号建物跡 (南より)



第 1 号建物跡、柱穴

第 6 図版



第 3 号、第 4 号建物跡 (南より)



第 3 号建物跡、柱穴

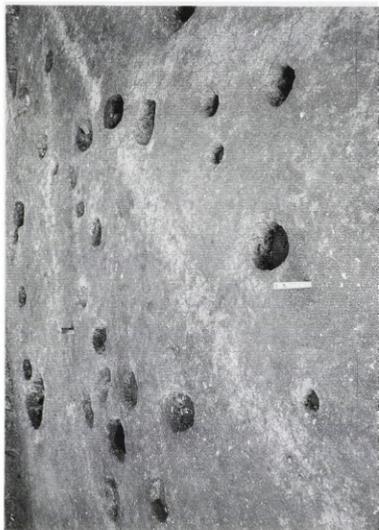


第 5 号、第 6 号建物跡 (南東より)



第 6 号建物跡、柱穴

第7図版



第7号建物跡(西より)



第7号建物跡、柱穴



第8号建物跡(東より)



第9号、第10号建物跡(南より)

第8図版



第2号建物跡、柱穴セクション



第4号建物跡、柱穴セクション



第5号建物跡、柱穴セクション



第8号建物跡、柱穴セクション

第9図版



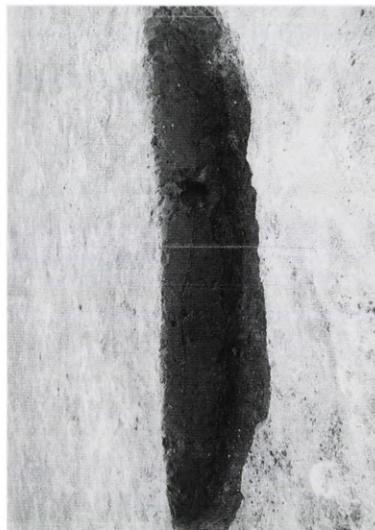
第1号遺構跡(西より) SX-01



SX-01セクション(東より)



第2号遺構(南より) SX-02



SX-02セクション(東より)

第10図版



第1号溝跡 (西より)



第1号溝、北端面セクション (北より)

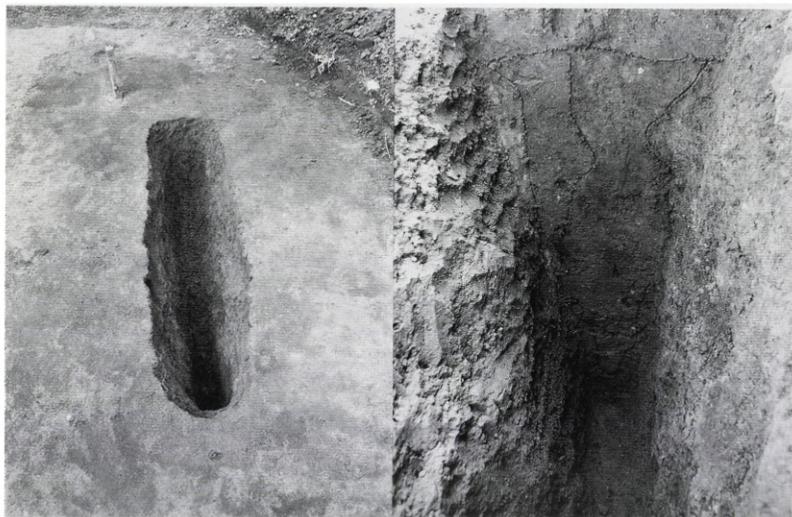


第1号溝、ベルトセクション (南より)



第1号土坑跡 (西より)

第11図版



第2号土坑跡（東より）

第2号土坑セクション（西より）



遺構全影（調査終了時）（東北より）

第12図版



1



2



3



4



5



6



7



8

第1号住居跡、出土遺物（1～8）

第13図版



1



2



3



4



5



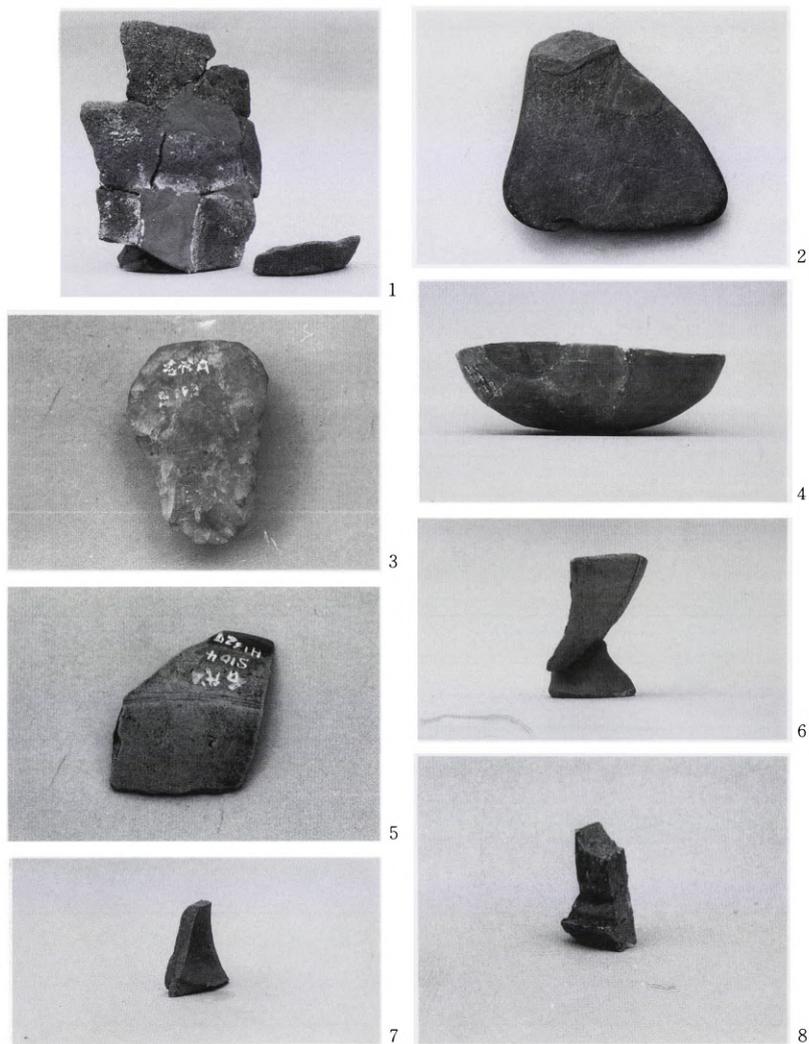
6



7

第1号住居跡出土遺物(1) 第3号住居跡出土遺物(2~7)

第14図版



第3号住居跡出土遺物（1、2、8） 第4号住居跡出土遺物（3～7）

第15図版



1



2



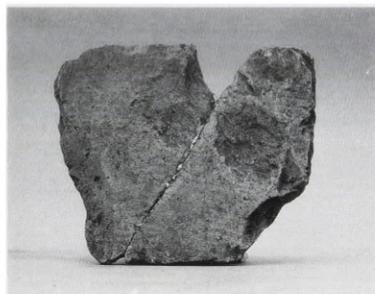
3



4



5



6



7



8

第6号、第8号建物跡出土遺物（1、2） 第1号、第2号遺構出土遺物（3、4）（5）

第1号溝跡出土遺物（6） 第1号土坑跡出土遺物（7、8）

# 名代A遺跡発掘調査報告書

平成2年2月20日発行

編集・発行 福島県矢吹町一本木101番地

矢吹町教育委員会

印刷 矢吹タイムス印刷